

めしが精銳なるフォックス號の砲門は直に木柵を破りラングーン港を封鎖す。ダルフリージョー卿一面國王に向ひて熟慮を求め一面戦端の準備をなし少將ゴドフィン陸兵五千八百に將として水兵二千三百人之に伴ひ氣船十九隻舳艫相含みてラングーンに着す。先一船をして艦頭に休戦旗を掲げ國王の回答を求めんとして大金沙江を溯りしに忽ち緬甸兵の砲撃を受けしかば全軍直ちに上陸し激烈なる砲撃の後ラングーンを占領し次でバッセーン并にプローム二市を占領す。緬甸兵皆上緬甸に敗走し人民は皆ラングーンに來集して英人を歓迎す。時に阿華に復革命ありてバガン、メンの位を廢し其義弟メンドンメンを寺院に迎へて緬甸の王位に即かしむ。新王メンドンメン憐和を以むも條約を締結するの意なし。九月ダルフリージョー卿親らラングーンに赴き遂に此年十二月二十日の條約を以て白希州を英領に加へ緬甸王をして上緬甸を領せしむ。茲に於てラングーン港は英人の有に歸し降りて西紀一八六二年に於て英領緬甸州の首府となり益々繁盛の域に達す。是を第二次の緬甸戦争と爲す。

## 第六節 和蘭瓜哇侵畧の大成

西紀一七一七年瓜哇帝ヒューガル殞し其子親王アデバチ、アマング、ナゴラ Adipati Amangku Nagora 蘭人の承認を得て帝位を襲ぐ。西紀一七三一年帝殞し其子バクブア、ナ、セナバチ Pakubwana Senapati の時に至りてバタ非アに支那人の叛亂あり。當時バタ非アは南洋貿易の中心點にして各國の商人群集し殊に商機を見るに鋭敏なる支那人は其富、蘭人に匹敵し各國人の嫉を受け葛藤絶えず。蘭人支那人の在住者多きを憂ひ先二百人を拘引して錫蘭に送ると稱し洋上に至りて之を海中に投ず。報知のバタ非アに達するや支那人大に憤激し郭外ガンダリアの地に集合しシパンジャンと云ふ者を推して將とし蘭人を襲はんとす。其兵五千と稱す。已にして叛徒バタ非ア城に遊る。蘭人叛徒に與せずして城内に留る支那男子を盡殺するの令を下し殆ど九千人を虐殺し悉く其財産を掠奪す。在瓜哇の支那人各地に兵を擧げ蘭人に抗せんとす時に西紀一七三七年なり。瓜哇帝此機に乗じ先支那人を助けて蘭人を逐ひ後に支那人に及ばざんとす。故に陽に蘭人を助くるの爲をなし突然首府駐屯の蘭兵を襲ひて其將校を屠る。蘭人初めて始れしを知る。然るに瓜哇帝漸く支那人

の技術遠く瓜哇人の上に出るを見て恐怖の念を生じ且蘭人が終局の上にて勝利を博す可きを覺り蘭人と舊交を暖めんと欲しマヂェラ島の主權を蘭人に譲りスラバヤ等の地を割く。排蘭黨則ち錫蘭に殞し先帝の孫を推して瓜哇の帝号を僭し支那人と共に首府ケルタスラを襲ひて之を奪ふ。瓜哇帝蘭人の援を假り四ヶ月の後首府を回復し大赦の令を布く。敗餘の支那人干戈を藏め僭帝蘭人に降り戰爭終結す(西紀一七四一年)。是を支那人の乱と稱す。瓜哇帝先例を襲ひ國都をケルタスーラを距る凡六哩の地に遷しスーラケルタと稱す時に西紀一七四九年なり。當時瓜哇の酋長をはじめ一般人民は帝が蘭人に屈服せるを以て國辱なりと爲し侮蔑の意あり。好機に乗じて蘭人に割讓せる領域を回復せんとす。帝の末弟親王マングアミ Mungkabumi と云ふ者支那人の乱に際し從軍して武勇の名あり乱平ぎて後ケルタスーラの皇居に住す。時に僭帝を奉戴せる排蘭黨の殘黨なほスカワチ州に割據して降服せず僭にマングアミを招き擁して帝位に即かしめんとす。マングアミ其地に至りて初めて給かれしを知り同志を糾合して同州を奪ひ自らスカワチの親王アデバチと稱す。皇帝其統治權を許し相和す。宰相懼ばず之を以て將來の

禍亂を醸すものなりとし蘭領總督ワン、イムホップを説く。皇帝遂にスカワチ州を帝領に合するに決し親ら之を謁見室に於て告知す。マングアミ承諾の意を明言し夜に入りて黨與と共にスカワチに走り公然叛旗を擧ぐ。西紀一七四五年の親王の出走を以て所謂瓜哇戰爭の起原と爲す。

蘭人直に兵を出して之を攻む。支那人の亂の叛將バーク、ナガーラと云ふ者第一に蘭兵と交戦し破れてスカワチに至りマングアミに倚る。マングアミ女を以て之に妻はし宰相の印綬を帯びしむ。兩將の部下相合して殆ど十二ヶ月の間蘭人の攻撃に堪えマングアミ自らマタレム皇帝と稱す。バーク、ナガーラ繼嗣たらんことを求めて得ず。兩將又反目の舊狀に復す。會、瓜哇帝殞す時に西紀一七四九年十二月十一日なり。帝臨終に際し國內の主權を舉げて和蘭東印度會社に譲り將來隨意に統治者を定むるを許す。是より會社は全く土侯を統治するの權利を得先帝の子、年僅に九歳の兒童を立て、皇帝とす。バクブアナ Pakubana 三世是なり。マングアミ皇帝たらんとして得ず。蘭人と戦ひ互に勝敗あり。戦闘九年に互る。蘭人到底全島を統一する能はざるを見且統治者選擇の權を有するを以てマングアミをしてバーク、ナガ

ラ征服の功を完くするを誓はしめスーラ、ケルタの北に當れるギンガウチに於て條約を締結し瓜哇の一半を割きて之に與ふ。西紀一七五五年蘭領總督マンガツミに梭里檀サレタンの稱號を許可し之を公布す。茲に於て皇帝の兵と梭里檀の兵と相聯合してパークナガラを攻む。パークナガラ勇を奮ひて勢力を維持せしも到底成功の望なきを見て降を請ふ。乃ちカドワン等南方の山地に於て若干の地を與へて之を領せしめ和議成る時に西紀一七五八年なり。

戦争の開始せるより茲に至るまで前後十二年瓜哇島中最も肥沃なる地方を荒蕪となし兩軍各數千の死者を生じ瓜哇帝國の獨立なるもの結局其跡を留めず。蘭人の此役に於て費消し、軍費は西紀一七四六年より媾和に至る迄總計四百萬フロリン餘を要せり。而かも其結果に至りては全島の統治者として承認せられざるも統治上の實權は悉く之を獲得し皇帝梭里檀ネーデルラント孰れも共に虚器を擁するのみ。梭里檀其後マタレムの舊都を距る數哩の地に於て都を建て之をユギア、ケルタと稱す。西紀一七五八年の決定に於て和蘭はシェリボン島よりマヂユラ島の東端に至るまで北岸諸州の直接統治權を收め内地并にシェリボン島よりマランに至る南方の

諸州は之を平等に小分し舊に復して土侯の所領となす。

### 第七節 英國の南洋經略

印度に於ける英國の權勢盛ならんとすると共に東洋に於ける其海軍力は益々有力となりしを以て今本章の終に於て簡單に其南洋經略の一斑を記すべし。歐洲に於て所謂七年戦争の破裂せる時西紀一七六二年一月英國は西班牙の佛國と同盟せるを怒りて開戦を宣す。此年九月十八日英國艦隊十三隻二千の戦員を塔載しドラパー將軍之を指揮し突如としてマニラ灣頭に現はる。時に大僧正マヌエル、ロホー假に太守の職を兼ね英軍の侵入を見て抵抗を試みしが英軍機に乗じて進み二十一日マニラ城を圍む。衆寡敵せずロホー遂に降伏の告文を發し一切敵の要求に應ずべきを約す。時に司法官に愛國の士ドン、シモン、デ、アング、イ、サラサルなる者あり勇敢にして士心を得たり降伏の告諭に接するや小舟に乗じ重圍を破りて市外に走り諸州に檄して兵を擧げ以て英人に抗せしむ。西班牙人の内地にある者檄に應じて競ひ起り僧侶に至るまで皆義勇軍を率ゐ英軍をマニラ城に圍む。交戦年を越

わて未だ解けず西紀一七六四年三月英西兩國間に和約成立せるの報至るに及び英軍はじめて城を致して去る。サラサル西紀一七七六年を以てカヅカテに於て歿しと云ふ。

和蘭の東洋領地は佛國革命の時に際し痛く英國の爲に打撃を受けたり。西紀一七九五年和蘭本國は佛國の兵を受けて之に抗する能はず。新にバタ非ア共和國を組織して其與國となり此年十二月二十四日和蘭東印度會社は遂に解散す。蓋し英國海軍が滿刺加を攻めて蘭人を破り之を占領するに至りしは同年の事なり。同地は其後西紀一八一八年に至りて一旦之を和蘭に還附し、も同二四年英蘭兩國の條約により和蘭は永久之を英國に讓與す。錫蘭の居留地も亦西紀一七九五年を以て英人に奪はれトリンコマリは八月二十六日を以てジャフナタムは九月を以て其有に歸す。同島は西紀一八〇二年のアミアンの條約によりて公然英國王室の所領となり同一五年三月二日英人と土侯との間に協商成り全島英領となる。其他東洋航路の要衝たる喜望峯の殖民地も錫蘭、滿刺加と同年を以て英人の掌裡に歸す。英國軍艦ヒートン號が長崎に至りて暴行を行ひしは西紀一八〇八年の事にして

其詳細の記事は日本亞細亞協會々報第七卷に出づ。長崎の出島なる和蘭の國旗が其當時地球上に於ける惟一の同國々旗として記憶さるゝは二年の後和蘭が佛國に合併されし時の事なり。

英領印度總督ミント卿の派遣し、遠征隊は西紀一八一〇年七月八日を以てブルボン島に着し二日の後佛人を破りて之を占領し佛蘭西島も亦英人の有に歸す。西紀一八一四年巴里和約成るに及び佛人は復たブルボン島を回復し、も佛蘭西島は永久英人の所領となる。マウリシヤス島即ち是なり。瓜哇は是より先西紀一八〇八年に於てバンタム王國全く蘭國に服し同一〇年總督ダエンダルスは兵をユギア、ケルタに進めて梭里檀を廢し其子を立て、位を繼がしめ且四萬フロリンの償金を求め次で又スーラ、ケルタの皇帝をして其財源を割かしめ大に權勢を張りしが和蘭の佛國に併呑さるゝに及び西紀一八一一年ミント卿親ら遠征隊に將として九月十一日瓜哇に至り之を以て英領なりと宣言し十一日全く蘭人を驅逐す。然れども英人はユギヤ、ケルタの梭里檀を廢して其子を立てし等施政の點に於て改善する處なかりしかば西紀一八一四年八月十三日蘭英協商成り和蘭次で獨

立國となり西紀一八一六年八月十九日和蘭の國旗再びバタヴィア政廳に掲げらるゝや瓜哇人は却りて之を喜びしとぞ。英人瓜哇占領中の同島の知事はスア、トーマス、スタムフォード、ラッフルスにしてラッフルスは瓜哇遠征に際し帷幄の功あり且有名なる瓜哇史の著者なり。其後西紀一八二五年に至り前ユギヤ、ケルタ梭里樹の庶子デイエボ、ニーゴロなるもの亂を爲し平定せざる事五ケ年中央瓜哇は之が爲に大損害を受け蘭人も亦莫大の軍費を耗やす。

英國の海峽殖民地中前に記し、滿刺加を除き其他の占領時代を記せば下の如し。ピナン島は西紀一七八六年東印度會社の船長フランシス、ライトの盡力により其地の領主即ちケダ國酋長より買ひ受けしものなり。其對岸なるエルズリ州はエルズリ侯印度總督在職中西紀一八〇〇年を以て同じくケダ國より買収す。而して新嘉坡島は西紀一八一九年前瓜哇島知事ラッフルスの其地の酋長より買収し、ものにして同年二月以後東印度會社の所轄に屬し西紀一八六七年に至りて初めて英國の直轄殖民地となる。ボルネオ島の北岸なるラブアン島を占領せるは西紀一八四六年の事なり。更に轉じて濠洲は西紀一六一〇年蘭人の初めて發見し、所にし

て初め新和蘭と稱し、が西紀一七七〇年英國の有名なる航海家ジェームス、クック之を占領す。西紀一七八七年英國政府が初めて今のニュー、サウス、エールズに罪人を送りしを以て同洲殖民の嚆矢となす。其地を當時本草學灣と稱せり。次で西紀一八〇四年に至りタスマニアを以て罪人を放つので地となす。西紀一八二五年モートン灣を以て新南エールズの屬地となして殖民を試み同五九年に至りてクフィンストランドの殖民地となす。西濠洲の殖民地は西紀一八二九年の創設なり。フィリッポ港は西紀一八三五年を以て殖民され同五一年を以て非クトリア殖民地となる。南濠洲の殖民地は西紀一八三六年に始まる。ニュー、ジールランドは西紀一八四〇年を以て英國の有に歸す。是を近古紀に於ける英國南洋經略の梗概となす。

### 第九章 中亞に於ける英露衝突の初期英領

#### 印度の擴張并に露國の中亞侵略

「印度帝國」の著者ハンター氏曰く英人が征服者として印度に至るの前莫臥兒帝國は瓦解し了せり。故に最後の決戦は的里の帝王との間或は叛旗を誦せる其地方官との間に行はれずしてマアラタ族並シク族なる印度種族の二團體との間に試みられたり。マアラタ戦役は西紀一八一八年を以て漸く終結しシク族は西紀一八四九年に至りて全く征服せられたりと。而して此間英人が印度征服の事業進むと共に東西北の三面に於て接壤の地域と交渉事件を生じ英人權勢擴大史の局面に大變化を生ずるに至れり。前々章に述べたるネポール戦役前章に載せたる緬甸侵略は即ち其一端にして殊に重要な阿富汗戦役なりとす。蓋し阿富汗戦役の背後には中亞に於ける露國の南侵てふ大事の伏在するものあればなり。故に本章に於ては英人印度征服の事業を叙してシク族戡定の前後に及ぼし延きて英露衝突初期の顛末を叙し併せて中亞に於ける露國が南侵の事實に及ぼさんとす。アマアスト卿以

下本章に叙述せる英領印度總督の就職の年を掲ぐれば左の如し。

アマアスト卿	西紀一八二三年。	パッタルワース、ベイレ	西紀一八二八年。
ウイリヤム、ベンチンク卿	同 一八二八年。	スマ、チャルス、メットカルフ	同 一八三五年。
アウ克蘭ド卿	同 一八三六年。	エレンバル	同 一八四二年。
ハルデンジュ卿	同 一八四四年。	ダルフ、ジー卿	同 一八四八年。

#### 第一節 英人の印度内地經營

西紀一八二五年第一次緬甸戦役の時に際しジャット族のバルトポール國に紛議あり。此年バルトポール王殞し其子バルフント、シング年僅に七歳英國政府の承認を得て位に即き叔父を以て攝政となし、が幼主の從弟グルヂヤン、サルと云ふ者土兵の欸心を博し攝政を殺し幼主を幽して位を奪ふ。時に的里駐在の理事官スア、デ井ド、ラクテルロニー同地方の事務を總轄するの權限を委任せられバルトポールの紛議を見て其中央印度變亂の前驅たらんとを恐れ勳員の令を下し幼主の權利を助け温德斯坦の平和を維持し英國の主權を保護せんとす。ラクテルロニーは

第九章

中亞に於ける英露衝突の初期英領印度の擴張  
並に露國の中亞侵略

三八〇

クライヴ以下英領印度史上に赫々たる功名を放ちし甲冑政治家の一人にして、  
オレン、ヘスチングスの當時より軍隊の經歷を積み其ネポール征討の効績は已に  
上に記し、が如し、然るにアマアスト卿土侯の繼嗣に干渉する權利あるを疑ひ且  
バルトポール城の從來抜き難かりしを憶ひ軍隊の運動を拒むヲシタルロニー快  
々として樂まず遂に其職を辭し二ヶ月の後憤死す。ダルクマン、サル意益々驕り揚  
言して總督の命を奉せずラジブト族マアラッタ族等の無頼にして生業なきも  
の皆バルトポールに集る。アマアスト卿漸くにして政策の誤謬を知り開戦に決し  
コムバルミア卿をしてバルトポールを圍ましむ。尋常の砲撃効なく遂に火藥  
一萬斤を用ゐて城壁を紛碎するに決し轟然一發城直に下る。乃ち篡位者を幽し幼  
主の位を復して英國政府の後見を受けしめ温都斯坦<sup>ヒンドウスタン</sup>地方平安に復す。

ヘンチング卿の總督時代に於ては惟一のクールグ王國を併呑せるのみ。クールグ  
はマイソールとマラバルとの中間なる群山の地に位せる小國にして、非ジャナガ  
ル帝國の瓦解に際し西紀十六世紀に於てイックケリ市の高僧の移住して建設せる  
處なり。是を非ラ王朝と稱す。西紀十八世紀に於てハイダル、アリのマイソールに起

るや貢賦を非ラ王朝に要め其應せざるに於て之を攻めて二三の要塞を奪ひしが征  
服を完成する能はず。其子チャブーの時に至りクールグは屢其兵を受けしが曾て獨  
立を失はず遂に英人と同盟してマイソールを侵しセリ。ンガバタム陷落の後毎年象  
を英國に貢し忠誠の實を表す。西紀一八〇七年クールグ王々妃を失ひ男子なきを  
以て國法に背き二人の兄弟を黜け女子をして位を嗣がしめんとし、英人の認可を  
受け尋で其兄を殺す。弟リシガラシア身を寺院に投じて難を遁れ王の殂するに及  
び還俗して其姪を幽し位を篡ふ。ときに西紀一八一一年なり。西紀一八二〇年其子  
チャカ、非ラ、ラシア嗣ぎてクールグ王となり暴政至らざるなく己の意に適せざるも  
のは近親と雖も刑戮を免るゝ能はず。虐政十四年の久しきに及び英國政府も忍耐  
するを得ずクールグ王に向ひて警戒を加へしがクールグ王は自ら獨立の君主な  
りと稱して忠告を顧みず英領に逃竄せる妹と其夫との引渡を要求し遂に開戦す  
地險にして人強く英軍若楚を極めしも國王怯懦にして爲すなく大兵の至るを見  
るや林藪中に遁れて虐殺を事とし軍門に降る。ベンチンク卿クールグの人民をし  
てその國王を選択せしめんとし、が人民一同東印度會社の治下に屬せん事を希

第九章

中亞に於ける英露衝突の初期英領印度の擴張  
並に露國の中亞侵略

三八一

望し、を以て之を許し廢王をベナレスに移す時に西紀一八三四年なり。初めベンチンク卿が總督の任命を受けて印度に向ふや本國の博愛主義者の意見を容れ土侯の内治に干渉せざるを以て施政の方針となさんとす然れ共實際に臨むに於ては到底此方針を固執する能はずソリオルに於てもインドールに於てもジャイプルに於てもブンデルカンドに於ても將たラッドに於ても皆干渉の必要を生じ之を實行せり殊にマイソールに於ては國王と攝政との軋轢より施ひて叛徒の蜂起となり西紀一八三三年行政事務を擧げて英人の掌中に收め年金三萬五千磅と國內の純收入五分一を國王に給す故に爾來マイソールは其實に於ては英領に異なる處なしベンチンク卿以下の諸總督に付きて史家のその印度を去るに臨みて初て適任の總督と稱すべしと評するもの新領土官吏の多數に移して何れの國に於ても適せざるなからむ而かもベンチンク卿は内治及財政の上に於て改善整理を試みし事著しく或はアッサム地方に茶樹を培養せしめ或は印度の惡習慣たる寡婦の殉死を禁じ或は土人を官吏に登用するの政策を擴張し或は内地の旅行者を要撃せる暗殺者の一類を驅逐し又は紅海を経て英國との間に氣船の航

路を開きし等一々枚擧するに遑ならず卿の施政中西紀一八三三年英國政府は東印度會社の免許狀を改正し以來會社は通商事務を執らず法律を以て歐洲人の定住を許し參事會に司法官を加へ法典編纂委員を設けマコーレイを以て司法參事會員兼法典編纂委員長に任ず。

メットカルン卿は出版の自由を許可せるの外治績の殊に記す可きものなくアックランド卿次で總督となる卿の在職の初より印度西北境上に暗澹たる黒雲現出し緬甸戰役以後十年間の平和時代茲に終結し是よりシク族の戡定に至るまで又十年間の戰爭時代を見るに至れり阿富汗<sup>アフガニスタン</sup>戰役并にシク族戰役は節を改めて詳述すべきを以て本節には其他の重要な侵略を記さんに阿富汗<sup>アフガニスタン</sup>戰役終結の後當時の總督エレンバル<sup>エルンバル</sup>卿が着手し、第一の事業はシンド州の征服なりシンド州はインダス河の下流に位しアフ、マッ、シア、アブダリの治世中阿富汗帝國に屬し其後同地の地方官等はカブール政府に貢賦を納れて稍、獨立の資格あり英軍が阿富汗<sup>アフガニスタン</sup>占領中はシンドの地方官等は英國に好意を表し、が其破れてカブールより退軍するや條約の規定に背きて敵軍に通ずる者ありスア、チャールス、ナビエアリ征討の



任に當り西紀一八四三年二月英軍三千を以て二萬のシンド兵をミアニーに擊破し翌三月シンド州の首府ハイダラバドの近郊に於て又大勝を博す。茲に於て英國終にシンド州を併呑す。

グワリヤルに於ては是より先西紀一八二七年ダウラット、ラヲ、シンデア殂し王妃バイザ、バイ王族ジアンコジ、ラヲを養ひて大王の位に即かしめしが兩者の間に權勢の争起りて内亂を生じ西紀一八三三年ベンチンク卿の干涉によりて漸く大王の親政に歸す。西紀一八四三年二月ジアンコジ、ラヲ、シンデア殂して嗣子なく王妃タラバイ年僅に十二歳なり八歳の男兒を得て養子となし位に即かしむ是をジァジ、ラヲ、シンデアとなす。王妃は内藏頭の職にあるダダ、カスジを以て攝政に任ずるの意ありしがエレンバルー卿は前大王の叔父マーマ、サアヒツアを以て攝政と爲す。タラ、バイ甚だ憚ばず宮中の女官を集めて朋黨を作り其勢力を以てマーマ、サアヒツアを斥けて自ら攝政と稱しダダをして實權を行はしむ。エレンバルー卿十二歳の一女子の爲に屈辱を受け忍ばんとして忍ぶ能はずグワリヤル駐在の理事官をして同地を去りて的里府に至らしむ。然るにダダはグワリヤル軍隊を籠絡して自己の爪

牙となし不穩の舉あり。西紀一八四三年十二月エレンバルー卿親らアグラに至りヌア、ヒユー、ゴフをして兵をグワリヤルに進めしむ。此月二十九日マハラジポール并にパンニアルの兩地に於て等しくシンデアの軍隊を破る。翌年一月グワリヤルに於て條約を締結し守備隊の經費に供せんが爲め領域を割讓せしめ保護國と爲す。インドールに於ては西紀一八三三年マルハル、ラヲ、ホルカルに嗣て大王となりしハリ、ラヲ、ホルカル西紀一八四三年を以て殂し翌年二月其養子も亦殂し、を以てエレンバルー卿は之を併呑するの意ありしがインドール駐在の理事官總督の司令を受けず前王妃の指名せる養子を以て大王となしツカジ、ラヲ、ホルカルと稱す。エレンバルー卿深く理事官の處置を怒り之を詰責し、も事既に定まりしを以て強て干涉を行はず。此年六月エレンバルー卿監督局と議諧はず歸國の命を受く。シク族戦役終結の前後より會、印度内地土侯の殂落し、もの多くダルフージ卿の注意を惹起せり。印度種族の故慣に據るに祖先を祭祀するの必要より養子の必要を來し、が養子が政權を繼承すべきや否は他の問題にして英國が主權を掌握せるより養子の認許を行ふに至れり。初め西紀一八一八年ヘスチングス侯がマ

アラタ宰相を廢するやシワジの裔サタラ王をして幽囚を免れしめ少許の地を與へて之に君臨せしめしが其故業を復するの異圖あるを以て西紀一八三九年其弟を立て、之に代らしむ。西紀一八四八年新サタラ王歿して實子なく臨終に際し養子を爲す。タルフージー卿養子をして故王の私産のみを相續せしめサタラ王國を收めて英領となし孟買地方廳の管轄に歸す。此年ラジプーナのキラウリ王も亦歿して實子なくサタラ王の如く養子をなす。タルフージー卿は同一の理由を以て其地を收むるの精神なりしが同國は同盟國にして屬國にあらずてふ監督局の議に従ひ養子を承認す。ナグポールに於ては西紀一八二六年幼王成年に達し、を以て英國の干渉を止めしが親政以後弊政百出し西紀一八五三年其歿落の後嗣子なきを以て英領に兼併す。ハイダラバットに於てもニザムの施政甚だ悪しく軍制改正の必要を生じ其經費に充んが爲め西紀一八五三年を以てペラール州を割讓せしむ。此年名義上の君主たるカルナチック巡撫并にタンジョール王共に歿して嗣子なくタルフージー卿は其遺族に養老金を支出する事となし多額の年金を廢す。前マアラッタ族宰相バジ、ラヲも亦此年を以て歿して實子なく養子ナーナ、サアヒップ前例に倣ひ年

金の給付を要めしもタルフージー卿之に應せず傳へ云ふバジ、ラヲの遺産は五十萬磅の額に達し、と。其後西紀一八五六年オウド王國兼併の事あるも後編に詳述するを以て叙述に便とす。

## 第二節 ネポールとの關係

ネポールの宰相ビム、サイン、タバの權勢は英人と交戦の後も些も毀損せらるる事なく西紀一八〇四年より西紀一八三七年に至るの間全權を握れり。幼冲の大王は西紀一八一六年を以て成年に達し、も間もなく歿して幼兒嗣ぎ西紀一八三二年宰相の情人なる老攝政皇后死去せしもビム、サイン、タバの權力は害せられず。已にして幼兒成年に達して位に即きしが性質暗愚にして人君の資格なく宰相の勢益、盛なり。然るにビム、サイン、タバが大王の爲に英領の印度種族に屬せる豪農の女を納れて王妃となし、に此女子敏慧にして奇智に富み大王の爲に宰相の束縛を脱れしめんとしビム、サイン、タバが其愛を割かんとして次妃を宮中に納るゝや益々宰相を怨み制す可らず。曾て西紀一八〇三年を以て其の職を黜けられし。前宰相の遺

子ランジヤング、バンデイと通じ大王の侍講グループを籠蓋して自家の爪牙となし陰謀を廻らす。初めネポール職役の終るや宰相の反對黨は英人に宰相を排斥せん事を求めしがカトマンヅー駐在の外交官は内治に干涉するを拒みしを以て王妃の黨與は英國政府とタバ家とを併せて仇敵視す。西紀一八三七年王正妃の幼兒暴に死す王妃之を機として急に宰相を捕縛して毒殺の嫌疑者と認め其甥マタバル、シングと共に禁錮の刑に處しランジヤング、バンデイを以て宰相となす。

然るにカトマンヅーには又穩和黨なるものありてタバ家の零落を好まず王次妃も亦極力ビム、サインの爲に國王に説きしを以て兩派讓歩し穩和派の領袖ルーゴナス、パンヂット代りて宰相となりビム、サイン、タバ等の禁錮を免す。王正妃心頗る満足せず西紀一八三八年突然首府を去る三哩のバスバットナスの寺院に赴きランジヤング、バンデイを伴ひ其宰相の職に復するを見ざれば還宮せざるの意を揚言す。大王遂に其請を容れランジヤング、バンデイを以て宰相となし、かば翌西紀一八三九年ビム、サイン、タバを拷問し其自殺するや遺骸を市に棄つ。此間王妃と大臣とは使を四近の朝に派しラホール、緬甸、拉薩、ヘラット等の同盟を求め以て英人に抗

せんとす。西紀一八四〇年ラウクランド卿書を大王の許に送りて反省を求め兵を境上に出して偵察を試みしかば大王大に驚き更めて穩和黨の一領袖フハッタ、ジヤング、チロウントリアを宰相に任じ翌年グループを免職す。王正妃怒る事甚しく王子をして位に即かしめんとし且大王をして英人と開戦せしめんとし柔弱なる國王頗る進退に苦みしが西紀一八四一年の末王正妃暴に歿し英領印度總督又其境上の兵を撤す。

西紀一八四二年英軍が阿富汗地方に敗績するや王子の暴動到底其止る處を見る可らず。或は國都駐在の英國外交官を殺さんとし或は甚しきは大王に向ひて暴行を加へ刀剣を蒙らしむるに至る。大王王子が神の降世にして早晚英人を驅逐すべきなりとの卜者の言を信じ惡も掣肘を加へず。王子時に年十二蓋し故王妃の教唆によりて大王を驚かし其位を簒はんと思想より此暴行に及びしなり。王次妃其嫉視を受け王宮に晏坐する能はず二子を伴ひて村間に匿る。已にして英軍カブールに於て全滅するの報ネポールに達し大王バンデイ一族并にグループを召還して再び之を用ゐしがバンデイの一領袖旨に悖ひ追放の刑に處せらる。同年冬に至り

て國內の貴族軍人等王子の暴政に堪ゆる能はず革命を議しグルーを再びベナレスに放逐し民間に隱匿せる王妃を迎へて攝政と爲さんとす。十二月二日大王親ら革命派の相談會場に至り且諭告し且脅迫して之を解散せしめんと試みしが衆應せず。七日に至り大王遂に革命派の願意を容れ翌日王妃を迎へて攝政に任じしが却て國政混亂の基を開き政令大王太子王妃の三途より出で宰相斷然たる處置に出で一を容れて他を拒む能はず。

カトマンゾーの各黨派は曾てラホールに使せるマタバル、シングの歸國して政變を一轉せん事を望むもの漸く多く西紀一八四三年マタバル、シング遂に國都に歸る。乃ち先大王に謁見してパンデイ一家一族を退けん事を請ひ以て叔父ビム、サイン、タバの爲に仇を報じ同年冬チウントリアに代りて宰相となる。其宰相となるや太子に結びてタバ家の遺領を舊に復せんとし實子を以て儲位に即かしめんとせる攝政王妃と隙を生ず。マタバル、シング不滿の貴族を集めて殺戮を行ふの意ありしが駐在外交官スア、ヘンリ、ラウレンスの忠告を納れて之を行はず。已にして大王、王妃と共にマタバル、シングが太子と親密なるを厭ひ陰に之を除くに決し西紀一八

四五年の初に於て終身宰相の職に任じて其心を驕らしめ五月十八日の夜宮中に於て暗殺す。王妃の情人ガッガン、シング最も此舉に與りて力ありしと云ふ。フハッテ、ジャング、チウントリア宰相となりガッガン、シング閣員に加はり王妃政權を握りて長子の爲に太子の位置を奪はんとす。太子大に怒り黨與と議して西紀一八四六年九月十四日ガッガン、シングを其自宅に暗殺し宰相以下顯官數十人を政廳に要撃して悉く之を殺す。ジャング、バハツル直に宰相となりて王妃の提議を斥け太子を助けしかば大王王妃と共にベナレスに赴き西紀一八四七年太子遂に大王の位に即く。ジャング、バハツルの執政中國内漸く平穩にして一二の變亂なきにしもあらざるも注意するに足らず。ジャン、バハツルは西紀一八七七年の初に於て死しとぞ。

### 第三節 シク族の裁定

パンチャブ地方に定住せるシク族は宗教上の團體にして一面クロムエルの麾下に屬し、英國の鐵甲隊の如く一面戰國時代に於ける我一向宗徒の如きものなり。

其起源に付きては已に第五章に於て略叙せるを以て讀者請ふ參看せよ其軍隊をカルサと稱し十二隊に分ちて各領袖を置きて之を統轄す是をシルダルと稱すカルサとは援はれたるものとの義なり。アムリツアル市を以て教徒の首都となし毎年大會を開くランジイト、シングと云ふ者西紀一七八〇年を以て生れ西紀一八〇〇年頃年未だ丁年に達せずしてカブールの阿富汗帝の知遇を受けラホールの太守に任せらる。ランジイト、シング勇敢にして機智に富み巧にカルサの熱誠を利用し阿富汗帝に對して叛旗を擧げしめ遂に其獨立を完くし頻りに四境を侵しシルダル等をして兵馬倥傯日なからしむ。蓋し當時英將レークの武勇赫々として英軍の勇猛なるを知らしめざりしならんにはランジイト、シングは兵を温都斯坦に出して其征服を完くし、や疑ふ可らず然れ共其英人に敵するの難きを知り西紀一八〇九年サットラジ河左岸の諸州に對する英人の要求に従ひ其主權を爭はず。ランジイト、シングは短身にして痘痕滿面左眼を失し生來文字を知らず而かも衆を御するの才氣ありパンチャブ大王の實權を有するも親らカルサ兵總督と稱して戰勝を以て悉く上帝并にグルー、ゴインドの功績に歸す賢なりと云ふも誰か之

を否まむ。

西紀一八三九年ランジイト、シング殞しパンチャブ國亂る。初めランジイト、シング歩卒の中よりラジブト族の兄弟二人を拔擢して殊遇を加へ其兄ゴラブ、シングを以てジャムの太守に任じ其弟デアン、シングを以てラホールの宰相となす。シク族兄弟の榮達を嫉み怨言朝野に滿つ。ランジイト、シングの長子カラク、シング位を嗣ぎてデアン、シングの職を免じ、が後任者其人を得ず。翌西紀一八四〇年嗣子と共にデアン、シングの計策に陥り相次ぎて弑せらる。デアン、シング乃ちランジイト、シングの王子を立て自ら實權を握らんとし、が國人服せず。カラク、シングの王妃暫く政を執りしが其品行修まらざるの事實公にせらる、や遂に王子シル、シングをしてラホールの位に即かしめデアン、シング宰相となる。時に西紀一八四一年なり。西紀一八四三年大王宰相と互に他を除かんと謀り互に成功して恰も同時刻を以て共に刺客の爲に仆さる。デアン、シングの子ヒラ、シング直にランジイト、シングの幼子ツリツ、シングを擁し其生母を以て攝政となし親ら宰相となる。此時カルサ兵の横暴日を追ひて益々甚しく宰相之を制するの實力なく却て其制する處とな

### 第九章

中亞に於ける英露衝突の初期英領印度の擴張  
並に露國の中亞侵略

三九四

り西紀一八四四年終に變死す攝政王妃情人ラル、シングを以て大臣となしテジ、シングと云ふ者を以てカルサ兵の總督となし、が何れも軍隊を統御するの力なく遂に其銳鋒を避くるの必要よりシング兵を放ちて英領を侵さしむ。

西紀一八四五年十一月シク兵十萬大砲百五十門を以てサットラジ河を渡りしが兩將心中麾下の敗軍を欲し以て其彈射を脱るゝの意あり時に英將スア、ジョン、リットレル兵士一萬銃砲三十一門を以て境上フィロツポールの要塞を守りしがシク將軍直ちに同城を攻めずラル、シングはフィロツシャハルに向ひテジ、シングをしてリットレルに當らしむ新總督スア、ヘンリ、ハルジンデ、司令官スア、ヒュー、ゴフと共に報を得て大軍を以てリットレルを援け十二月十八日ラル、シングの兵とムードキーに戦ひ敵將を走らす已にしてリットレルの軍と合し二十一日フィロツシャハルを攻めしがシク兵能く戦ひ勝敗知る可らずラル、シングの真意發覺するに及びて守兵始めて動きて皆退却しテジ、シングも亦サットラジ河に背進す西紀一八四六年一月シク兵再び英領を侵し二十六日其一隊アリワルに於てスア、ハルリ、スミスの爲に破らる然るに其本隊はソブラランに於て堅牢なる要塞を築き本據と爲んさ

とす。二月初旬ゴフ、ハルジンデと共に進みて之を圍みしがシク兵の勇猛なる戦死を以て宗教の爲にすゞ爲し敵て恐れず二月十一日に至りて初めて之に克つ英軍死傷二千を超えシク兵八千戰場に仆る實に英領印度史上に於ける激戦の隨一とす。英軍船橋を以てサットレジ河を渡りラホールに入りて善後の處置を施しカルサ軍隊の數を大に減削しジャランダル、デアアの地を收めて英領をラ非河畔に及ぼす。スア、ヘンリ、ハルジンデ、功を以て貴族に列せらる。是を第一次シク戦争と爲す。

ハルンジデ、卿はラホール政府に軍費百五十萬磅の賠償を求めしがランジイト、シング死去の時千二百萬磅と稱し、遺産僅に五十萬磅を剩すのみ。カシミル并にジャムの太守ゴラフ、シング百萬磅を英國政府に支出し獨立して同地方の大王と稱せんとを請ひしを以て之を許す。ラル、シング宰相となり國政に當りしが陰に黨與を放ちてゴラフ、シングの領土を擾し、を以てラホール駐在外交官少佐ヘンリ、ラウレンスの知る所となり其職を免せらる。西紀一八四八年一月ダルフ、ジョー卿新任總督としてカルカッタに若し、後ラウレンス病を得て歸國しベンガルの女官スア、フレデリック、カアリ之に代りてラホールに赴きパンデブの収税制度を改革し、を

### 第九章

中亞に於ける英露衝突の初期英領印度の擴張  
並に露國の中亞侵略

三九五

以て土着官吏即ちシルダル等心頗る平ならず、初め西紀一八四四年ムルタン太守死し其子ムルラジ職を襲ひしがラホール朝廷より繼目金百萬磅の請求を受け之を拒絶す。然るにシク戰役終結し英軍國都に駐屯し且新任駐在官が財政制度を變革するに至り太守の職を辭す。新任太守カン、シング英人を伴ひ少許のシク兵を率ゐて西紀一八四八年四月ムルタンに至りしにムルラジ欺きて英人を殺しシク兵又敵に通ず。少尉ハルバルト、エドワルツ時にパンヌにありて收稅制度改革の任に當りしが自ら責任を負ひて兵を進め六月十八日ムルラジを破り遂に之をムルタンに圍む。時に攝政王妃情人の失權を恨み四近の諸王侯に通じて逆謀を企てしを以てベナレスに移さる。シル、シングなるものシク兵に將として少尉エドワルツと共にムルラジ征服の任に當りしが急に敵兵に通じて英軍に抗し援軍の英將井ッシユ已むなく退却しパンデヤ全部蜂起す。第二次シク戰役茲に於てか起る。ダルフージー卿は初め軍司令官ゴフ卿の意見を容れ冬季を待ちて鎮撫に着手するの心算なりしが今や一刻も猶豫を容さず。十月ベンガルを發してパンデヤに向ふ。シル、シング、ムルラジと和せずラホールに向ひて兵を進む。此頃其父チャッタル、シ

ング阿富汗帝ドスト、ムハメッド汗を説き共に英人に抗せしむ。少佐ゼルヂ、ラウレンス任にベシワル防禦に當りしが部下のシク兵悉く阿富汗帝に應じ如何ともする能はず捕虜となる。アットク城將大尉ハルバルトも亦同しく阿富汗兵に降る。十月ゴフ卿英軍に將としてフィロポールに至り十一月ラ井河を渡りてシル、シングとラムナッガルに戰ひ兩軍交綏す。翌西紀一八四九年一月十三日ゴフ卿チリアンワラの要塞を攻めて血戰を試み漸く之を奪ひしもシク兵は三哩を退きて他の要塞を築き英軍將校以下二千四百の戰死者あり。戰後兩軍互に凱歌を奏す。報告の英國に達するや政府スア、チャアルス、ナビエアーを以て印度に赴きて全軍の指揮を執らしむるに決す。是より先一月四日將軍井ッシ兵を回してムルタン城を下しムルラジ英軍に降る。井ッシ乃ちゴフ卿の軍に加はりて二月二十二日グーセラットの大砲戰に於て悉くシク族の精銳を仆す。英軍連に北進して殘兵二萬をラワルピンデに虜にし印度河を渡りて阿富汗帝を破りベシワルを復す。三月二十九日ラホールの大王ツリップ、シングを廢して五萬磅の年金を與へムルラジを終身禁錮の刑に處しパンデヤを英領に併吞す。其之を統治するや能く從來新領土施政の利弊を察し法

規を定めしを以てパンヂャブの内政は對亞政治家の好模範なりとす。カルサ軍隊は皆英國々旗の下に入籍し後年土民兵叛乱の時の如き殊に軍功を建てしと云ふ。

#### 第四節 阿富汗帝國の沿革

阿富汗斯坦は上古の波斯人希臘人を始として後世土耳其人阿富汗人莫臥兒人等印度遠征者の必ず經由せるの地にして英人印度征服の事業進むや深く其西北境上に注意するに至れり。現世紀の初佛帝ナポレオン印度征討の説あるや總督ミント卿が使節を波斯並にカブールに派遣し、は防守同盟を爲すの意に外ならず。其後露國南下の勢盛なるや遂に茲に衝突の端を開くに至れり。阿富汗斯坦の地分ちて四大部となし北にあるをカブールと爲し、南にあるをカンダハルと爲し、東にあるをペシワールとなし、西にあるをヘラットと爲す。古諺に印度の霸王たらんと欲せば必ず先カブールを領せよとあるを見るも其要地なるを知る可し。阿富汗人はサンニ派の回々教徒にして身體強壯善く槍劍を用ひ早く武勇を以て遠近に聞ゆ。其遠祖は或は猶太民族に出てしとの説あり。嫡出の裔をアフダリ種族と稱し、庶出の裔を

ギルザイ種族と稱し、往古より軋轢絶えず結局アフダリ種族の勝利に歸しギルザイ種族は深山に匿る而してアフダリ種族の一派にバルクザイ種族と云ふ者あり。近世に至りてアフダリ種族をツィラニ種族と稱し、彼此の争鬪曾て止まず。

阿富汗帝國の近世史は西紀一七四七年波斯帝ナザルシアの暗殺に遭ひし時に始まる。阿富汗の領袖等は直ちに波斯軍の陣營を棄ててカンダハルに赴き、隨意に帝王を選擧して波斯の干渉を脱せんとす。時に或はツィラニ種族の長者アマッド汗を推すものあり、或はバルクザイ種族の長者ジェマル汗を推すものあり。結局アマッド汗皇帝の位に即き、ジェマル汗甘じて臣下の列に加はる。此時カブールの「宮城」はナザルシアの駐屯せしめし波斯兵所謂赤帽種族の守る處となり、而して波斯人はシニア派の回教徒なりしがアマッドシア赤帽種族と盟約を締結して城門を開かしめ、カブール、カンダハル兩地の皇帝となり、以後春夏の二季を彼に遣り、秋冬の二季を是に消す。アマッドシアは阿富汗の諸領袖に對して赤心を披き、殊にジマル汗の欵心を求め、常に兵を出して隣境を侵し、オクサス河以南ヒマレヤ山以西カシール、パンヂャブ、コーラサン、ヘラット、シンド、ベルーヂスタン等を略し、南印度洋に達



す。其温都斯坦を侵し、的里府を陥れ印度史上に大關係を有し、は已に第六章以上に記し、處なり。西紀一七七三年ア、マッドシア殞し次子チムル親王遺命を以て皇帝となりチムル、シアと稱す。長子カンダハルに皇帝を稱し、ガチムル、シアの兵を受けて敗軍し異郷に流寓す。

チムル、シア即位の後ジェマル汗の子バエンダア汗を優遇し諸豪族を信任せしが領袖等其暗弱なるを侮り心服せず。チムル、シア憚ばず漸く赤帽種族と親しむ。爲に政權大に衰へ北方バルク東南バンヂア、シンド等の地方に公然叛旗を擧るものあり。チムル、シア親ら赤帽種族の軍隊を率ゐて征討に向ひしがメシヤツル滯陣中突然叛徒起り赤帽隊の力により幸ふじて暗殺を免る。チムル、シア大に怒りメシヤツル住民の三分の一を極刑に行ひしが是より精神異狀を呈し西紀一七九三年を以て殞す。皇子二十三人ありバエンダア汗意を第五子デーマンに屬し皇帝を撰擇すと稱して悉く諸皇子を一堂に集め欺きて之を幽する事五日其飢えて骸骨と異なるなきに至り始めて之を免しデーマン、シアの即位を承認せしむ。然るに其後デーマン、シア恩義を忘れバエンダア汗を斥けて其位置を斥け其財産を沒收す。人心服せず諸

兄弟の各地を領するもの互に陰謀を逞くす。會、バンヂャブ亂ると聞き之に赴きしに長兄カンダハルに於て皇帝と稱しマアムード親王ヘラットに叛す。乃ち長兄を捕虜となして其明を奪ひマアムードをヘラットの總督となしシク族の叛魁ラシグイト、シングをバンヂャブの太守となす。而かもバンヂャブは復阿富汗人のものにわらず。デーマン、シア其弟シア、シージャをメシヤツルの總督に任じカブールに歸りしにバルクザイ種族カンダハルに於て陰謀を企つるの説ありしを以て急に之に赴き悉くバエンダア汗以下の諸領袖を虐殺す。

バエンダア汗十九子あり長子フチ汗此時ヘラットに遁れ同地の總督マアムード親王を教唆して異圖を廻らし共にカンダハルに赴きてバルクザイ種族を説きて兵を擧ぐ。デーマン、シア親ら之を征服せんとし却て敗軍して捕虜となり明を奪はる。其後諸國に流寓し遂に英領ルーヂアナに至り東印度會社より年金を得て其余生を送る。エルズリ侯が曾て其温都斯坦侵略を恐れ參畫し、を思へば人生の榮枯常なきを知る可し。マアムード立ちて阿富汗帝となりフチ汗宰相となりて政務の實權を左右す。時に西紀一八〇〇年なり。其後カブール市に赤帽種族と阿富汗種族

即ちシニア派とサンニ派との間に偶然争を起しサンニ派兵を執りて赤帽種族四百餘人を殺す。宰相フチ汗兵を用ゐて之を制し、がサンニ派是より宰相を恨み西紀一八〇三年彼が其地方の叛徒鎮壓に向ひて國都にあらざるに乗じシア、シュージアをメシツルより迎へて皇帝となしマアムード、シアを「宮城」中に幽す。フチ汗師を班して後新帝の宰相となりしが新帝シア、シュージア漸く之を忌みて其職を罷めメシツルに至りてミント卿の派遣し、使節エルフィンストンと會し佛蘭西に對する同盟を約す。然るに前宰相フチ汗赤帽種族と通じてマアムード汗を幽囚の中に救ひ立て、カブール皇帝の位に復しシア、シュージアを歸途に拒して之を敗る。シア、シュージア英領に逃れて其兄デーマン、シアと同じくルーヂアナに於て給養を受く。フチ汗文武の才あり帝を擁して政を施き南シンド、ベルーヂスタンを服し國境の内大に治る。初めマアムードの皇帝となるや其弟フィルツを以てヘラットの總督となし、がフィルツ陰然獨立君主を以て自任し貢賦を納めず。然るにヘラットは舊來阿富汗、波斯兩國の争地にして西紀一八一六年波斯兵進軍の擧あり。フィルツ爲に救をカブールに求めしを以て宰相フチ汗大に喜び兵を率ゐてヘラットに赴きフィルツ

を目して叛徒となし捕へてカブールに送る。フチ汗の弟にドスト、ムハメッド汗と云ふ者あり其不在を利して後宮に闖入し公主の玉帶をはじめ宮女の寶玉を奪ひフチ汗の怒を買ひカシミルに走る。此間マアムード、シアの子カムラン親王常に宰相の專横を怒り其姉が玉帶を奪はるゝを聞くや父帝に請ひてヘラットに赴きフチ汗を執へて其兩眼に白熱の鐵針を投じ以て其明を奪ふ。ドスト、ムハメッド汗報を得て急に兵を擧げてカシミルを發してカブールに向ひしかばマアムード、シア逃れて哥疾寧に走りカムラン并に旨宰相に會す。時に人心已にマアムード、シアを去り策の施す可きなきを以てカムラン親らフチ汗を刑し西紀一八一八年父子共にヘラットに走り同地に君臨す。ドスト、ムハメッド汗ツラニ家の公子を立て、皇帝となし、が其陰謀あるを知り之を廢し以來バエンダア汗の諸子阿富汗帝國の各地に在りて互に交戦に耽り國內大に乱れメシアワル遂にランジイト、シングの奪ふ所となる。西紀一八二六年ドスト、ムハメッド汗カブールの主となり次で選まれて皇帝の位に陞る此に於てツラニ家仆れてバルクザイ家之に代る。

## 第五節 波斯兵のヘラット攻撃

波斯は西紀一七四七年ナザル、シアの暗殺の後波斯人とトルコマン即ちチェンド朝とカヂアル朝との間に内訌止まず。西紀一七九四年に至りカヂアル朝初めて優勢を占め現王朝を開く。太祖をアーガムハメッド汗と爲す。西紀一七九七年太祖暗殺に遭ひ其甥フチアリ、シア嗣ぐ。帝の治世の初西紀一八〇〇年英領印度總督エルズリ卿佛帝ナポレオンの野心を看破し阿富汗帝デーマン、シアの侵略を恐れ大尉ジョージ、ルコムを波斯に遣はし帝と攻守同盟を結びし事あり。其後露帝ボウル一世佛帝と結托して印度の征服を企て英國に所謂恐魯熱なるものを起し、が間もなく露帝暗殺せられて事止む。此時露國は頻にコーカサス地方を蠶食して波斯に逼りしかば西紀一八〇四年フチアリ、シア兵を起して露に當り援を英國に求めしに時に英露の交情親密なりしを以て之に應せず。佛帝此機を利し西紀一八〇五年密使を波斯に遣して同盟を約し更にガルダグヌ將軍をしてテヘランに赴き波斯の兵制を改革せしむ。西紀一八〇七年佛帝露帝アレキサンドル一世とナルジットに會し翌年の春

を以て連合して印度遠征を謀るの説ありしかば印度總督ミント卿は復少將マルコムを波斯に派して同盟を議せしめしが佛將ガルダグヌの勢力盛にしてマルコム使命を果す能はず。然るに此時龍動政府より派遣されたる公使ジョアンヌなるもの盛に黃白を投じて波廷の心を動しナルジットの約によりガルダグヌが露に當る能はざるに乗じ再び攻守同盟を約す。

其後歐洲の形勢一變し露帝も亦志を翻へして英國と提携し、かば英國深く重を印度の防禦に置かず波斯との盟約の如き全く等閑に付せり。故に當時波斯は露と戦ひ頻りに援を英國に求めしも更に應せざりしを以て波軍連戦連敗遂に西紀一八一三年十月三日英國の仲裁に依りグリスタンの永久平和を媾じテレクの河口よりクールの河口に至るの地を露國に割譲す。波斯帝深く英國の舉措を憤りしも露國に對する報復の念熾なりしを以て遂に忍びて翌年十一月二十日テヘランの盟約を締結し英國と攻守同盟を約す。西紀一八二五年露帝ニコラス一世新に位に即き翌年波斯帝の異議を顧みずゴッチャ湖附近の地を占領す。所謂永久平和破れ波斯の皇太子アパス親王軍を率ゐてアラクセス河を渡りチフリスに向ひて侵入し、

イシャーを圍む露の名將バスキエービッチ總督の任命を受けて波斯軍に向ひ僅に一萬の兵を以て四萬四千の敵の本隊をゼーハムに破り翌年アラクセス河を渡りて南進した。またテランブラクに克ちエリバンを抜きタウリスを陥れテヘランの危急旦夕に迫る。西紀一八二八年二月十日トルコマンチヤイ城下の盟成り波斯露國にアラクセス河以北膏腴の地を割き軍費賠償金二千萬ルーブルを約す。是より先波斯帝は開戦に際して英國の應援を求めしに英國はテヘラン條約の約項中波斯の挑戰的なる時は救援せずとの一項あるを利し波斯帝が曲の露國にあるを抗論せしも更に耳を傾けざりしかば是より波斯帝は漸く英國を疎んずるに至れり。是に反して露國は和成るの後公使を派遣し益々恩義を波斯に賣る。

西紀一八三三年波斯太子アバス親王ホーラサン地方を征して功あり茲に於て露國公使シモニッチの懇懇に應じヘラットの遠征を圖る。ヘラットは實に印度の鎖鑰にして波斯より印度に至る第一の關門なり。中亞の古語に曰くヘラットを誦するものは一服以て明に見るを得可く一腕以て善く撃つを得可しと。或は曰く此地は世界に光明を與ふるの燈火なり。世界若し身體たらばヘラットは實に之が靈魂なりと。此

年夏アバス親王其子ムハマド親王をして前隊を率ゐてヘラットに進み之を圍ましむ。然るに其秋皇太子偶病を得てメセッドの陣中に歿ししを以てモハマド止を得ず。圍を解きて本國に歸る。蓋し波斯帝の口實は其曾てナザルシアの治下に屬ししと云ふにあり。實はヘラットが常にカブールの阿富汗帝に従はず獨立せるを以て此争を生じしなり。是より先西紀一八二九年ヘラット主マアムードシア暗殺に遭ひカムラン嗣ぎて君臨せしが鴉片を嗜みて國事を親らせず大臣ヤルムハマド汗實權を握る。此役に際し波斯親王媾和を議すと稱してヤルムハマド汗を陣中に迎へ強迫して其意を翻さしめんとし前勝の齒を強奪す。ヤルムハマド汗怒ること甚しく竊にヘラットに逃れて國政を執りカムラン媾和に意あるも可かず曰く余が齒の齧に復せざるに於ては決してヘラットを敵手に渡さずと。

翌西紀一八三四年波斯帝フチアリ殂しモハマド次で位に即く。新帝功名の心其父に譲らず特に露使と親交あり再びヘラットの遠征を企てんとす。英國公使ヘンリ、イリス、テヘランに至り新帝の即位を賀し且其遠征の英國の意に背くを説きし。モハマド耳を傾けず。西紀一八三六年夏遂に親ら軍に將としてヘラットに向ひ露

使シモニッチも亦從軍す。此時に當り英人ジョン・マクネールと云ふ者あり西紀一八三五年以來英京に於て機關雜誌を發行し専ら東方問題を論究し排露政策を主張す。翌年秋拔擢せられてテヘラン駐劄公使となり行李匆々任地に赴きしが波斯帝已に兵を出し國都にあらす。波斯帝ムハメッド遠征の途次北境トルコマンの叛亂に遭ひ轉じて之を征して利なく止むを得ず師を班し明春を以てヘラット征服の宿志を達せんとす。マクネール頻に奔走して波斯ヘラットの和解を策し、其効なくシモニッチ益々波斯帝を教唆し且軍費を辨ずるを約す。英国外務大臣バルマレストン卿報を得て西紀一八三七年二月露國駐在の公使を経て露國政府の辨明を求む。露國外務大臣ネッセルローデ伯公使の行爲は政府の訓令に背馳するを答へシモニッチ波斯帝の本營を去りしも陰に帝を指嗾する事前日に異ならず。波斯帝ムハメッドは遂に同年七月を以て復た親ら軍を率ひ十一月遂にゴリアンを陥れ進みてヘラットを圍む。城中の阿富汗人能く防戦し婦人小兒等皆城壁に上りて瓦礫を投じ、敵兵水道を絶つに及び住民大に苦みカムラン降志あり。時に英人少尉ポテンシアなる者城中にあり身を以て衆に先ちて民心を鼓舞し奇策縱

横ヤルムハメッド汗の氣力を壯にし波斯兵克つ能はず。マクネール此機に乗じ自ら陣中に赴きて媾和を謀り將に成らんとするに及び忽然シモニッチも亦陣中に來りしを以て波斯帝又其言に動されマクネールの建議を退く。マクネール勢の不可なるを見直ちにテヘランに歸り公使館を撤して土耳其の東境に至る。時に西紀一八三八年六月なり。此月十九日英國艦隊突如として波斯灣の要港ハラク島に上陸して之を占領す。マクネール乃ち書記官を波斯帝の陣營に派して最後の談判を試みしめ同時に波斯國民に向ひて檄を發し波斯帝の罪を問はんとするのみにして人民に對して敵意を有せざるを告ぐ。波斯帝恐惶措かず遂にヘラットの圍を解きて本國に退軍す。マクネール更に第二の要求を提出して曰くゴリアンの地をヘラットに還付しフアラシーセバール并にクアルクの守兵を撤せざれば舊交を復する能はず。波斯帝はゴリアンの舊來波斯領なるを説き露國の居中調停を乞ひしがバルマレストン卿更に應せず。帝遂にゴリアンを還附し盡く英國の要求に應じ、を以て英國もまたハラク島の占領兵を撤去し西紀一八三九年の初に至り兩國の交際舊に復す。其後西紀一八四八年ムハメッドシア殞し長子ナシルエオン波斯帝とす。

なる西紀一八五一年ヘラットのヤル、ムハメッド汗死し其地殆んど無政府の情況に陥りしかば翌年三月波斯帝は再び兵を出して之を占領し、が英國艦隊直ちに波斯の要港アブセールに上陸して帝を脅迫し、爲又兵を撤す。

### 第六節 第一次阿富汗戰役

是より先阿富汗帝ドスト、ムハメッド汗は前年ランジイト、シングの占領せるベンツルの地を回復せんとし援を英領印度總督ラウクランド卿に求めしもラウクランド卿之に應せず。蓋し東印度會社は西紀一八三二年印度河を溯りて商道を開くに當り専らランジイト、シングの力に頼りしを以てなり。西紀一八三七年波斯帝ヘラット包圍中露人ビトケービツテと云ふ者露帝の密書を携へてカブールに至りドスト、ムホメッド汗をして露國并に波斯と同盟を結びヘラットの攻撃に加はるを約せしむ。阿富汗帝未だ兵を擧げず英國の虛喝政略功を奏し波斯帝ヘラットの圍を解きしがラウクランド卿一步を進めて露の勢力を阿富汗の地より驅逐せんとし西紀一八三八年十月一日ルーヂアナ在住のシア、シューリアを擁しドスト、

ムハメッド汗に對しシムラに於て宣戰す。然るにランジイト、シング英軍の境内通過を拒みしを以て英軍シンドを経てクエッタに至り此に於て孟買軍ベンガル兵と合しスア、ジラン、キーン全軍を督してカブールに向ふ。西紀一八三九年四月進みてカンダハルを取り將軍ナット守備隊を指揮し少佐ラウリソン阿富汗帝の名を以て民政事務を執る。七月本隊が疾軍を襲ひて之を陥れしかばドスト、ムハメッド汗北走ラクサス河を渡り布哈爾に逃る。八月英軍遂にカブールに入りシア、シューリアをして復び阿富汗帝位に即かしむ。英國公使スア、ウイルヤム、マクナーテン帝の顧問となりて施政を輔佐す。此年十一月露國遠征隊を基華に送りしが其失敗の顛末は後節に記すべし。ドスト、ムハメッド汗故業を復せんと欲し屢、戰ひしが互に勝敗わり翌年の末に至り遂に英國使節に降りしを以て英人之をカルカッタに護送して年金を與ふ。

波斯帝の退軍後ヘラットは非常に財政の窮乏を告げ國民を月祖伯種族に奴隸として賣却するの説ありしかば英國大金を給して之を救はんとす。ヤル、ムハメッド汗英國の眞意を疑ひ陰に款を波斯帝に通ず。ヘラット駐在の外交官トッド英兵駐

屯の議を出しヤル、ムハメッド汗との談判破裂し任地を去りて英領に退く。ブウクラ  
ンド卿大に其輕舉を怒る。之に反して阿富汗斯坦各地駐屯の英軍はシア、ジョージ  
アをして孤獨ならしむるの危険を覺り西紀一八四一年に至るもなほ撤兵せず。然  
るに英軍のはじめカブールを占領するや莫大の黃白を散布して土民中の強豪な  
るものを歸服せしめしが一度ろの支出を止めしより國民漸くシア、ジョージアを  
厭ひて英人を懼ばず。此時スア、ツイルヤム、マクナーテン孟買知事に任せられ未だ  
任地に赴かずしてカブールを去る三哩の英兵屯營の傍に住す。後任者スア、アレキ  
サンドル、ブアーンヌ已にカブールに着し市中の中央熱鬧の地にあり。駐在兵の指  
揮官はスア、ジラン、キーン轉任して將官エルフィンストーン之に代りスア、ロバ  
ト、セール并に旅團長シエルトン之を助く。此年十月スア、ロバト、セール一旅團の  
兵を率ゐる叛徒鎮定の爲ジエララバッド方面に向ふ。十一月二日カブール市内に亂  
民蜂起す。ブアーンヌ一隊の援兵を送らん事をマクナーテンに求めしもマクナー  
テン將軍エルフィンストーンと共に躊躇して速に之に應せず。亂民益々加はり遂にブ  
アーンヌの居宅を圍みブアーンヌ午前八時より午後二時に至るまで極力之を防

きしも衆寡敵せず吏員二十三人と共に亂民の手に斃る。身を以て免れしもの僅に  
九人のみ。

午後三時に至り旅團長シエルトン初めて歩卒を率ゐて市内進入を試みしが此時  
に於ては市内の住民悉く亂民に應じ又爲す可らず。已にして地方の民亦之を聞き  
數千隊を爲してカブールに集り全國舉て英人を驅逐せんとするの勢あり。ドスト、  
ムハメッド汗の子にアクバル汗と云ふ者あり前年父帝カブール出奔の時又遁れ  
て山中に入り竊に動靜を伺ひしが茲に至りて急にカブールに歸り親ら帝位に即  
かんとす。シア、ジョージアは「宮城」中に幽閉せられて全く勢力なし。英軍糧食缺乏  
し軍氣頗る沮喪す。將軍エルフィンストーン前公使マクナーテンと退却を議し叛魁  
アクバル汗と交渉す。アクバル汗糧食を給するを約し賠償金に對して人質を求め  
西紀一八四一年十二月二十三日マクナーテンと最後の協商を開くに際し突然之  
を殺す。其後アクバル汗公然此暴舉を謝し更に協議を新め西紀一八四二年一月六  
日英軍遂に退却の途に就く。然るにアクバル汗大兵を以て之を追ひ且人質を増さ  
ん事を求めて止まず。英軍退きてカイバル越に至るに及びギルザイ種族左右の山

上より火器を以て要撃す。アクバル汗、ギルザイ種族を制止するの権力なきを謝し、同時に阿富汗兵を放ちて虐殺を恣にし掠奪を行はしむ。初め英軍のカブールを發するや、戦員四千家族従者一萬二千の多數を有し、が或は飢餓に勝えず、或は風雪に侵され、且此背盟の事あり、全軍覆没し、ジェラ、パッドに至りてセールの軍に投じ、その軍醫ブライドン一人に過ぎず。

西紀一八四二年二月、エレンバル、卿が新に總督に任せられてカルカッタに着し、時は阿富汗事件の成行實に上述の如くにして、在印度の英人一人として復讐を思はざるなし。將軍ボロック一隊の兵を率ゐ、此時ランジイト、シング已に死して、繼嗣英軍の通過を拒まざりしかば、バンヂャブを経てメシヤソルに至り、暫く兵を休め、四月、カイバルに入りて、ギルザイ種族を驅逐し、ジェラ、パッドに至る。是より先、セール此地に在り、アクバル汗の統率せる阿富汗の大軍を受け、奮闘撓まず、恰も敵軍に一大打撃を蒙らしめしときなりしかば、アクバル汗圍を解きて、カブールに歸る。カブールに於ては、アクバル汗の不在に際し、バルクザイ種族ドスト、ムハメッド汗の甥デーマン汗を推して、帝位に即かしめ、ツौरニ種族のシア、ジョージア

帝を欺き、其「宮城」を出るを待ちて、銃殺す。然るにツौरニ種族の「宮城」にあるものシア、ジョージアの子を擁して、相下らず、カブール全市巷戰、寧日なし。アクバル汗師を班して、バルクザイ種族と聯合して、「宮城」を陥れ、次でツौरニ種族と和し、親ら大臣となる。幼帝弑逆の舉に遭はん事を恐れ、英軍に投じて、將軍ボロックの保護に倚る。茲に於て、アクバル汗、カブールの君主となり、英軍の退去を請求して、ボロックの拒絶に接し、捕虜と人質とを北方の山間に送り、大軍を率ゐて、カブールを發し、英軍の進撃を沮まんぞす。

エレンバル、卿は初め事態の重大なるに驚き、撤兵の秘密訓令をジェラ、パッド并にカンダハルの守備隊に與へしが、英人の輿論捕虜を敵手に委するの處置に忍ぶ能はず、反抗甚しきを以て、又前の訓令を改め、適宜進軍せしむ。將軍ナットは熱誠の士なり、退軍の令に接して、大に怒り、ラウリンソンと共にカンダハルを守り、數月の間、重圍の中にありて、屈せず、援兵の至るを待つ。將軍ボロックは温和の人なり、しもなほ退去の命令を實行するを拒み、遂に總督をして、訓令を改めしめ、西紀一八四二年八月、ナット進軍の報に接し、セールと共にジェラ、パッドを發して、テチー



ン峽に至る英軍の過ぐる處同胞の死体なほ累々として左右に横はり全軍激奮せざるなし。偶々アクバル汗の兵士峽中に進み來り兩軍會戦、アクバル汗大敗して北方の山地に遁れ九月英國の國旗「宮城」城頭に樹立す。已にしてナットの軍も亦エレンバル卿の訓令を奉じ西紀十一世紀に於て哥疾寧のマアムードがグーセラットの地に於て掠奪せるソムナスの白檀門を陣頭に立ててカブールに入る捕虜并に人質は賄賂を守兵に與へしを以て是亦歡呼の中に英軍の迎ふる所となりカブールに着す。英軍復讐の念頗る熾にして火藥を用ゐて中亞に於ける石造建築の最たるカブールの市場を粉碎し暴を以て暴に報ひ十月凱旋の途に就く。アクバル汗復歸り其父を以て阿富汗帝となし、かば英國枉て其意に従ひドスト、ムハメッド汗を赦してカブールに歸らしむ。ドスト、ムハメッド汗英國と和約を結び國內の施設に従事し且北方を經略してアムーダリア河に至り一強國の基を建つ。英軍が初めて、阿富汗斯坦を服し、時大佐ストッダルトを布哈爾に派して同國と和親を結はんとす。同一の目的を以て敖罕に派遣されし大佐コノリも亦同時に布哈爾に至りしが國王使節の眞意を疑ひて其舉動を監視シカブールの變報に接

するや直ちに兩使を牢獄に投シカイバル越の事あるに及び遂に兩使を斬に處す。茲に於て月祖伯諸汗國に英國の勢力を扶植せんとするの計畫は水泡に歸せり。

### 第七節 露國の第二回基華遠征并に敖罕侵略

中亞のキルキーズ部落は西紀十九世紀の初に於て已に露國服從の名ありと雖も其實は舊に依りてなほ邊境を侵し商隊を襲ひて不羈放慢なり而して裏海に於ても野民の露船を劫掠する事甚しく露人を捕獲して基華の市場に賣る。西紀一八三三年ペローフスキ、マレンブルク地方の長官に任せられて銳意野民鎮撫の事を計り裏海の東岸にノーヅラアレクサンドルスク堡を築きしも其地風土險惡にして用を爲さずエムバ河岸に兵民を土着せしめしも西紀一八三六年春其地の監察長野民の爲に捕へられ各地紛擾を極め露人の囚となりて基華にあるもの二千人に達す。ペローフスキ以爲らく野民の猖獗を擅にするは基華の應援あるが爲なり故に此地方を平定せんと欲せば先基華の巢窟を覆へし其威勢を挫くに若くはなしと因て再び基華遠征の議を起し救許を得て其準備を爲す。蓋し中亞に於て領域

を廣むるは露國の對英政策上當時に於て殊に必要な事となさずんばならず。乃ち西紀一八三六年を以て基華人の露領にあるものを捕へ基華をして露人の囚を放たしめんとし、が少數の老衰者を放ちしのみにして要求に應ずるの色なし。西紀一八三九年英軍が阿富汗斯坦に進入するの報あるや露國遂に基華征討の令を發す。其略に曰く此舉たる兵力を以て基華國王を要し悉く露の囚人を放たしめ貿易商隊の妨碍を除くにありと同年十一月十四日總督ペロフスキ兵五千二百七十八大砲二十門火箭砲四臺を率ゐてヲレンブルクを發す。會大雪降り嚴寒之に續き征師大に困難を極め十二月十九日を以て漸くエムバ堡に達す。基華兵二三千チウシカクルに逆襲を試み敗血病痘病等露兵の營中に傳染し死亡相續く。十二月三十日ペロフスキ進軍の策を決しエムバを發してチウシカクルに向ひしに積雪益々深く寒威益々烈しく氣温攝氏零下四十度に降り風雪又大に起り人畜の凍死益々多し。兩地の間僅に四十五六里に過ぎざるに行軍一月を費し現兵僅に千八百五十六人に過ぎず。而して基華猶遠し。因て西紀一八四〇年二月遂に軍を回へし再び前の艱難を経て其六月辛くヲレンブルクに抵り八ヶ月の間徒に曠野の往復を爲す。是

を露國第二回の基華遠征と爲す。

露國此失敗を以て基華の侮蔑を招かん事を恐れ更に遠征の準備を試みしが基華國の使者至り露の囚人を還付し且國王が露人の捕獲賣買を禁じしを告げしにより之を好機會となして參謀大佐ニキホロフを派遣して媾和を議せしむ。是より先西紀一八三六年以來布哈爾國王露國に條約締結を求めしを以て同時に少佐ブチエニエフを布哈爾に派遣す。兩使がヲレンブルクを發ししは實に西紀一八四一年五月なり。ニキホロフは同年九月上旬を以て基華に抵り談判三月に及びしも議論合はず遂に其意を達せず。翌西紀一八四二年八月參謀大佐ダニリヨフスキ更に基華に赴き當時新に位に即きシラヒム、グリ汗と談判を開き新王をして掠奪禁止、奴隸廢止、通商保護等を約せしめ和議成る。ダニリヨフスキ翌西紀一八四三年二月を以て基華の使節と共に聖彼得堡に抵りて復命し條約の批准交換成る。布哈爾に向ひしブチエニエフは西紀一八四一年八月を以て同國に抵り直に國王に見ゆしが已にして布哈爾と放罕との間に戦端を啓き國王親征大臣留りて交渉の局に當るも其和親條約を結ぶの意なきを知り直に歸國す。此時アラル海岸よりシンド

リア河下流の土地は一面基華領分にして其中流以東は敖罕領分なり露國其西北  
ヲレンブルクに根據を置き東南曠野に向ひて右兩汗國領の中間なる野民を制馭  
す然るに露國意ありて基華との條約に全く國境を定めず故に露兵進むに従ひて

基華も亦自ら敵視の舉に出で和親條約は遂に其用を爲さず。  
初め露西亞のキルキーズに於るや曠野の北部なる中部落は之を西西伯利の管轄  
に付し西部の小部落は之をヲレンブルクの管轄に付し、西西伯利の方面は綏  
撫功を奏し、もヲレンブルクの方面は制馭宜きを得ず西紀一八四二年ヲブルチ  
エフ、ペロフスキに代りてヲレンブルクの長官となり進取の策を定め西紀一  
八四五年より境線を東南に擴張してトルガイ及バイルギース河に就きて堡壘を築  
き翌年裏海海賊抑壓の爲アレクサンドルスク城を今の地に移すキルキーズ之に  
抗する事能はず西紀一八四七年に至て露兵遂にシルダリア河口に出でライム堡  
を築く基華兵キルキーズと合して來り攻めしが力足らずして敗軍し復之を攪さず  
りしを以てヲブルチエフ、哈薩克兵を土着せしめアラル海に軍艦を泛べて守備を固  
くすシルダリア河口より上流百餘里の地に阿克、メチエチと稱する敖罕の堅城あり

り舊來敖罕人此地を根據となし其前にクムイシグルガン、テム、クルガンの二小堡  
を設けて野民を制し以て露兵に備へしが此に至り大に警戒を加へ其守兵を増す。  
此時露西亞ヲレンブルクの前長官ペロフスキ再び其任に就き早く阿克、メチエ  
チを取らんと欲し西紀一八五二年參謀大佐ブラムベルクをして兵五百を率ゐて  
之を襲はしむ。ブラムベルク河岸に沿ひて進み前に備へし二小堡は容易に之を陥  
れしも阿克、メチエチ城の守將ヤクブ、ベクは夙に驍名あり其守備甚だ固く却て敖  
罕兵の破る所となり退軍す。翌西紀一八五三年ペロフスキ自ら兵二千二百大  
砲十二門を率ゐてヲレンブルクより發し再び阿克、メチエチ城を襲ひて遂に之を  
取る敖罕の威勢大に挫折しシルダリア河方面のキルキーズ全く露西亞に歸服す。  
ペロフスキ進軍の時シルダリアの下流カザル支流分派の點とカラウジャク  
河會注の點に野堡を構へしめ彼れを第一堡是を第二堡と稱し新に略し敖罕の  
クムイシグルガン堡を復して第三堡と稱す。後ライム堡を第一堡の地に移しカザ  
リンスクと稱す。又更に阿克、メチエチに城き其長官の名に因りて之をペロフスキ  
キと稱す。而してヲレンブルクより此諸堡に連絡を通じ之をシルダリア兵線と稱

す。此間西伯利の方面よりも露軍の一隊西伯利兵線と稱してセミバラチンスクより發し野民鎮撫の舉に乗じて漸く南進し西紀一八四六年遂にキルキーズ大部落を屈服せしめ翌西紀一八四七年に至り其牧場に就きてカバル堡を設く是より西南に轉じて伊犁河を渡り天山西路の北麓に達し中亞人民の土着地方東北の限界なるアルマツトと稱する敖罕領の一小村を略し堡を構へて此に據り改めてウエルヌイと稱す時に西紀一八五四年なり。

要するに當時露兵は三面より中亞に侵入しペロフスキ、ウエルヌイ并に裏海の東岸アレクサンドルスク城を以て其根據となす。西紀一八五四年聖彼得堡の邊境事務取調所に於て進取退守の兩説を討論に付しシルダリア兵線と西伯利兵線とを兩方より進め之を土着の地方に聯ねて新境を畫定するに決し、がクリメア戰爭の結果廟議一變して又退守の説に歸す。同年西伯利の方面に於て略取せる地域を束ねてセミバラチンスク州を設け殖民地の經營に従事し西紀一八六〇年に至るまで復侵略を行はず。其間シルダリアの方面に於てはキルキーズを土着せしめんとし河邊の地を測量し中亞通商論起りて裏海の東岸に良港を求めんとし測量

に着手す。又參謀大佐イグナーチエフを使節として基華并に布哈爾に派し更に和親を議せしめしが談判其意を達せず諸汗國との關係は依然として變更せず。

## 第十章 鴉片戦争の本末並に長毛賊の蜂起

(西紀一六三七—西紀一八五三)

## 第一節 英人支那交通の初期

英人の支那と交通を開きしは遙に他の歐洲諸海國に後るゝも今や其貿易額に於ては遠く他の諸國を凌駕せり。彼の東印度會社が其貿易の利益を鰥斷せる凡る二百年の間は終始基督教の布教に反對せしを以て爲に支那人をして英人は單に私慾のみ盛にして道德の觀念なきとの誤解を抱かしめたり。西紀一五九六年女王エリザベスの時支那皇帝に宛てし國書を携帶せしめて使節を派遣せしが其結果失敗に終りしを以て西紀一六三七年<sup>崇禎</sup>五月<sup>康熙</sup>澳門沖に碇泊しこエッデル Westall の艦隊を以て支那に至りし最初の英船となす。エッデルの支那に派遣さるゝや英人と臥亞<sup>ア</sup>總督の間に成立せる休戰の約に基き總督より澳門の知事に宛てし書狀を携へしも澳門に到て大に葡人の冷遇を受く。乃ち廣東に至りて通商を開かんと決し船

を虎門 Bogue Ports に進めしに堡壘の主將砲門を開きしを以てエッデル血戰數時間の後之を陷る。廣東の總督大に驚き通商を諾して戰利品の還付を要めしかばエッデル貨物を其船に満載して歸國す。

其後支那に於ては明清兩朝交替の際に當り外國貿易の如き萎靡して振はず西紀一六六四年<sup>康熙</sup>に至りて東印度會社は一隻の商船を澳門に赴かしめしが其目的を達する能はず。此頃國姓爺の子鄭經清朝に服せずして台灣に割據しゝかば英人は之と安平城並に厦門の兩地に於て通商の約を結ぶ。但し當時台灣の地產物乏しくして安平城の貿易は永續せざりしが厦門の貿易は大に有望にして西紀一六七七年<sup>康熙</sup>を以て其地に赴きし商船の報告に基き翌年商館建設の議を決す。已にして滿洲朝の干涉烈しく西紀一六八一年<sup>康熙</sup>會社は兩地の商館撤退の命を下しゝが四年の後又厦門の貿易を回復す。廣東の通商は久しく葡人の妨害を蒙りしが西紀一六八四年の頃に至りて初めて同地に商館を設く。西紀一七〇一年<sup>康熙</sup>東印度會社の社員キャッチプール Catchpole は長官の許可を得て三隻の商船を舟山、寧波地方に送りて通商を試みしが福建廣東の總督が英人の浙江の關稅低廉なるを利

して同地に至るもの多き時は勢閩粵の海關税を減ずるに至るを以て上疏して浙江の關税を倍加せん事を乞ひしを以て利益を得る能はずして歸る。此年英人は又崑崙島(フロ、コンドル)を占領して堡壘を設けしが翌年キャッチボールは更に商館を設く。此島は交趾支那の海岸にありて南洋貿易に従事せる支那船の寄航地なり。然るに馬來種族の土民交趾人の教唆を受けて西紀一七〇五年を以て英人を襲ひて悉く之を虐殺し次で商館を焼きしを以て英人の占領永續せず。

外國貿易の盛なるに従ひ西紀一七二〇年<sup>康熙五十九年</sup>支那政府は新に各商品に四分の税金を課し且之に従事するの商人を一定して納付金を爲さしめ次で輸入品の課税一割六分に至る。英國の商人は抗議の功あるべきを期し西紀一七二七年<sup>雍正五年</sup>廣東總督に向ひて歎願し<sup>が</sup>が間もなく復舊し翌年より輸出品に悉く一割の關税を賦課す。乾隆帝の即位するや西紀一七三六年英人の請願を容れて此課税を免じ<sup>が</sup>が廣東に於て其上諭を傳達するに際し英人を叩頭せしめんとし爲に紛議を生じ、事あり。西紀一七四二年<sup>乾隆七年</sup>海將アンソン Anson 澳門に着す是を英國の軍艦が支那に至るの權輿となすセントウル號是なり。已にして復厦門並に寧波の通商を

開かんとするの舉あり彼に至りし商船功を奏せざりしが西紀一七五五年<sup>乾隆二十年</sup>英人フリント Flint 洪任輝と云ふ者は是に赴く。此頃支那政府外船の入港を禁ずるの布告を發し西紀一七五九年<sup>乾隆二十四年</sup>には英人の住居せる寧波の家屋を毀つに至りしかばフリント同地を去りて天津に赴き廣東地方官並に商人團體の亡狀なるを訴ふ。乾隆帝調査委員を任命し之と共に廣東に赴かしめしが地方官はフリントを吹きて獄に投じ責むるに寧波を開かんとせるの罪を以てす。フリント澳門附近の牢獄中にある事二年半にして英國に歸る。

西紀一七八四年<sup>乾隆四十九年</sup>黃埔に於て英船の祝砲を放ちし時偶々一丸の裝置を遺失して一支那人の死亡を招きし事あり地方官欺きて砲手を捕へ遂に死刑を宣告す。且此頃支那商人と英國商人との間に金錢上の關係を生じ其額多大となり甚處理に苦むの報有しかば西紀一七九二年<sup>乾隆五十七年</sup>マカルト子一伯 Macartney (馬甘尼)を以て使節に任じ英清兩國間の關係を改善せしめんとす。翌年其天津より北京に赴くや清國官吏は英國人民獻貢の船と記せる旗章を立てしめしが在清中は大に優待を極め九月十四日皇帝に謁見を許す。此時叩頭の事に關し交渉困難なりしと云ふ。歸

途内地を経て廣東に赴きしを以て隨行員スタウントン、バルロウ兩人の紀行は英人に支那てふ智識を興へしの功少ならず西紀一八〇二年<sup>嘉慶</sup>英軍は印度總督の命を受けて其佛人の有と成んを恐れ澳門を占領し、が本國より和約の報あるに及び支那政府の抗議と共に其地を退去す其後西紀一八〇八年<sup>嘉慶</sup>佛人同地を襲はんとし英將ヅルルーが一隊の水兵を上陸せしめて葡人を援ひし時再び支那政府との交渉を惹起し、がヅルルーの讓歩して歸帆するに及びて事止む西紀一八一六年<sup>嘉慶</sup>八月二十八日アマアスト *Amherst* 卿又使節として北京に赴きしが叩頭の禮を行ふを拒みしを以て皇帝に謁見するを得ず空しく歸國す此時の接待員は戸部尙書<sup>和世泰</sup>なり。エリス、アベル、デニス、並に通譯官モリソン(馬禮遜)等の紀行は此時の著なり。

## 第二節 鴉片貿易の紛議

英國東印度會社支那貿易獨占の期限は西紀一八三四年<sup>道光</sup>四月二十二日を以て終了せるが故に英國政府は前年十二月十日ナヒエアー卿 *Lord Napier* を以て支那

貿易管理官に任じ、かば卿は此年七月十五日に於て隨行員と共に澳門に着す隨行員中の重なるものをデニス並にロビンソンとす共に曾て會社の役員たり。一行の廣東に至るや税關監吏は長官に報告して曰く三外鬼來ると初め廣東の總督は澳門の清商を介してナヒエアーに求むるに同地に滞在せん事を以てし、がナヒエアーは之を可かず直ちに廣東に赴き書記官をして書を携へて城門に赴かしむ清國官吏拒みて之を總督に傳達するものなし總督はナヒエアーが清商の手を経て通信せざるを怒り八月十六日を以て遂に英人の通商を禁じ九月二日に至りて之を實施す。ナヒエアー直ちに英國軍艦二隻に令を下して江上に溯りて英國の臣民並に其船貨を保護せしむ軍艦の虎門<sup>ホクモン</sup>を過ぐるや堡壘に向ひて砲火を交はし、が互に相傷なく十一日を以て黃埔<sup>ワウポ</sup>に碇泊す。然るにナヒエアー三伏の暑中に際し此不快の位置にありしを以て其健康を害し、かば九月十四日澳門に退却の議を決す。廿一日廣東を發し五日を経て澳門に至りしが病勢益々重く二週間の後十月十一日同地に没す。廣東總督はナヒエアーの出發後直ちに英人の通商を其舊に復す。デニス、ロビンソン相次ぎて監理官となりしも共に澳門に住し時に伶仃<sup>リントン</sup>に寓する

に過ぎず。西紀一八三六年<sup>道光</sup>十二月十四日英國政府監理官の職を廢し大尉チャールズ・エリオット Elliot をして領事を以て其事を理せしむ。エリオット在職中鴉片貿易の事より英清兩國間に紛議を生じ其極遂に干戈を交ふるに至れり。

今支那に於ける鴉片貿易の沿革を尋ぬるに西紀前八百年頃既に亞刺比亞商人の罌粟を輸入せるものあり。降りて西紀十五世紀の末より東洋の貿易は葡萄牙人の掌中に歸し、が當時亞刺比亞人等が滿刺伽<sup>マカ</sup>に輸送し、貨物中鴉片と云ふ者あり。蓋し亞刺比亞語アフソンの轉訛せるものなり。西紀一五八九年<sup>万曆</sup>の支那關稅表中に鴉片十斤に付其價銀條二箇と規定せるを見るも以て鴉片貿易の行はれしを知るに足る可し。一説によれば罌粟は西紀一六二九年<sup>崇禎</sup>頭瓜哇に産し同地より初めて臺灣に輸入すとも云ふ。明朝の末に當り煙草吸用禁止令を發布し、が爲却て其代用として鴉片を吸用するの習慣を生じ西紀一七二九年<sup>雍正</sup>には鴉片の吸用に對しても亦禁止令を出し、が其輸入は毫も減少せず同六七年<sup>乾隆</sup>には其額増加して千函に達す。然るに此頃鴉片の産地なる印度ベンガル英人の占領する所と爲りしより其貿易は竟に英人の掌中に歸し西紀一七八一年<sup>乾隆</sup>より英國東印度

會社の特權となる。支那政府鴉片の身體を害し精神を傷ひ其毒甚しきを見て嘉慶帝の初年鴉片輸入の禁止令を施行し、が毫も其効を奏せず西紀一八一六年<sup>嘉慶</sup>鴉片一千二百函を燒きて前令を實行せんとし、が國人密に之を輸入して飲用するもの益多し。殊に西紀一八二二年<sup>道光</sup>鴉片輸入商と沿海の諸官衙との間に契約を結び鴉片一箱に付き一定の賄賂を納むるに至る。西紀一八三五年<sup>道光</sup>支那政府復英船を捕獲し此年二月二十三日廣東に於て其積載せる鴉片を燒く。

エリオットが貿易事務管理の命を受けし當時は鴉片の輸入三萬四千函に及び商人の利益一千六百萬弗に下らず。此年即ち西紀一七三七年<sup>道光</sup>英國商人は清國政府に向ひて公然鴉片輸入禁止令の廢止を乞ひしが許されず。翌年山東の黃衙茲なるもの深く鴉片の害を感じ禁令を嚴にせん事を上奏し、に廷議之を可とし新に制を立て、十人を一保となし互に僉議せしめしが密買なほ止まず發覺して罪を得るもの腫を接す。西紀一八三九年<sup>道光</sup>一月八日、清廷湖廣總督林則徐を擧げて欽差大臣となし廣東に至りて鴉片輸入禁止令の實施に當らしむ。是より先則徐禁煙の事を上書して清帝の心を動し、事あるを以て也。三月十日則徐廣東に着し先英人鴉



片輸入の實狀を熟察し令を下して曰く三日間を限りて悉く其蓄ふる所の鴉片を出せど。英人財に至るも令を奉ずるものなきを以て十八日則徐部下に命じて兵を以て之に臨ましめしかば英人已を得ず千三十七函を出す。則徐其全數ならざるを察し翌日在留外人の退去を禁じ且清人をして糧食を英人に給せざらしめ次で令して曰く鴉片四分一を出すものは婢僕を給せむ二分の一を出すものは食物を與へむ。四分の三を出すものは舊に依りて貿易を許さむと。二十四日復兵を出して商館を圍み迫害を加へしかば領事エリオット策の施す可きなきを見二十七日英商を説きて其令に従ひ全數を出さしめ翌月之を清國官吏に引渡す。總計二萬二百八十三函と稱す。則徐急使を馳せて北京に報告し其命下るの後澳門より更に送付し來れる八函と共に六月三日を以て軍卒に命じて悉く之を焼き石灰と鹽とを其灰に混合して海中に投ず。

五月二十四日エリオット以下在廣東の英人快々として同地を去り澳門に赴く。他の諸外國人も相次て之に倣ひ初め商船の廣東にありしもの二百八十八隻なりしに減じて廿五隻となる。清商産業を失ひて人心動搖ししかば林則徐は再び外國貿易

を許可して其舊に復ししが惟り英人のみは與るを得ず。七月七日英船の乗組員清國の水夫と争闘して其一人を負傷せしめしより兩國の間又交渉を滋し其結果在澳門の英人は葡人の連累せむ事を憂ひ八月二十六日を以て悉く香港に移る。同地は月の二十三日を以て英人の占領せる所なり。則徐乃ち沿海の郡邑に令して英人の上陸を阻げしめしかば九月四日九龍クワンロンに於て英船と支那船との間に衝突あり。英人糧食を得る能はずして飢餓に迫り進退維に谷まりて遂に侵略の志を決す。先軍艦二隻を廣東に遣はして曰はしむらく食を贈らずんば共に戦はむと。則徐直ちに部下に命じて之を拒がしめ大敗す。十一月三日英國の軍艦復川フクセン鼻島の沖に於て支那艦隊二十九隻と戦ひ其四隻を沈没す。十二月六日林則徐全く英人の通商を禁ず。英清兩國開戦の期は刻一刻より迫り來れり。

初め英國政府の方針は努めて穩和手段を取るにありて殊に鴉片貿易の不正なるは其承認する所なりしかば曾て領事エリオットに訓令を下して軍艦を廣東河内に溯らしめず。支那政府の猜忌を惹起せざらしめんとせり。然れども在清英人と廣東總督との衝突日を追ひて甚しく既に戦端を開始すとの報に接し之を放棄するに

忍びず西紀一八四〇年<sup>道光</sup>四月議會に對して征清軍費の協賛を要む。反對黨派極力之を否決せんと試みしにも拘らず其領袖の一人スア、ロバート、ピールは前年フオックスがヒット内閣の政策を攻撃し而かも同日を以て軍費を協賛せる實例を援き賛成の意を表し、かば討議三日後政府は九票の多數を得て遂に軍隊派出に決す。

### 第三節 鴉片戦争の戦局

英領印度總督ハルデンジ卿は本國政府の命令に接し印度喜望峯兩地駐屯の兵士一萬五千人を召集しゼオルデ、エリオット、Elliott(厄利阿多)をして陸軍を率ゐスア、ゴルドン、ブレームル、Bremer(布冷墨爾)をして海軍を統へしむ軍艦十五隻、瀛船四隻、運送船二十五隻舳艫相追ひて西紀一八四〇年六月十二日を以て澳門に着す。先使者を地方官の許に遣して媾和を議し其應せざるを見滞留一週間の後同月十八日ブレームルの艦隊纜を解きて北方舟山列島の定海縣に向ふ。定海縣は浙江省に屬し錢塘江口に位し南方各省より北京に至るの路に當り實に樞要の地なり。七月四日二十六隻の艦隊突如として定海縣附近に現はれしかば知縣兆公鎮以下爲す所を

知らず。五日英艦城寨に向ひて砲門を開き且其水軍を破りしを以て知縣等或は戰死し或は遁亡し翌日全島悉く英人の有に歸す。此日兩エリオット大使の職を以て舟山に着し次で寧波に至りて國書の傳達を要めしが其地の官吏は是より先厦門の地方官が兩使北上の時に際して執りし方針に基き之を肯せず二十四日英軍更に定海より西に轉じて錢塘江を渡り乍浦を攻めしが其將に陥らんとするに及び圍を撤して去る。大使エリオット等乃ち厦門並に寧波の兩港を封鎖して船首を北方白河に向け八月十一日を以て同河口に碇泊す。チャルス、エリオット直ちに國書を携へて上陸し、かば同地の總督琦善大沽にありて之を領受し皇帝に傳達するを諾す。同月三十日琦善北京政府の命を受けて大沽附近に於てエリオットと會見を遂げ言を盡して廣東に至りて商議せん事を要めしを以て英艦は九月十五日に至りて舟山に向け歸帆す。此間寧波附近に於て一二の小戦あり某將校の未亡人ノーブル夫人と云ふ者不幸にして捕虜となる清人の書に「英國の某内親王とあるもの即ち同一人ならむ。」

已にして舟山列島駐屯の英軍中に疾疫生じ初め上陸し、四千人中斃るゝ者四百

病む者之に三倍するに至りしかばセオルヂ、エリオット欽差大臣伊里布と休戦を議す。是より先清廷の議論林則徐の官を免じて英人に謝するを以て良策なりとして之を北京に召還し九月十六日琦善を欽差大臣となして廣東に赴き談判の局に當らしむ。兩エリオットは十一月六日之と休戦を約し二十日澳門に着し、ガセオルヂ微恙ありて其職を辭し、を以てチャルス特リ交渉を試みしも琦善容易に決するの色なし。殊に香港割讓の件を提出するや堅く可かず談判將に破裂せんとす。翌西紀一七四一年一月七日道光ニ艦隊司令官ブレール攻勢を取りて川鼻大角頭兩島の堡壘を奪ひしより琦善大に驚きてエリオットの提議を容れて北京政府に上申するを約す。エリオット此月二十日和約の成功して香港割讓の外に十日間内に六百萬弗の償金を受領す可きを公布す。然るに白河々口の英艦已に去りて復恐るゝに足らず林則徐以下の主戰黨其勢力を恢復し二十七日清帝戰鬪開始の上諭を發し二月十一日琦善の締結せる條約を破棄す。琦善妙齡の佳人と山海の珍味を以て英使の物欲を飽かしめ故らに和議確定の日時を遷延し間に乘じて軍備を充實し一擊外敵を驅逐せんとす。エリオット異志あるを覺て二月十九日ブレールに虎門攻撃を

命じ二十六日其地の堡壘を抜き大砲四百五十九門を奪ふ。琦善二十五日を以て英人を獲るものに重賞を與ふ可きを布告す而かも清廷和議中止の結果罪を琦善伊里布の兩人に嫁し三月十二日其職を免ず。是より先二月二十四日英軍舟山列島を撤退す。

在印度の陸軍少將スア、ヒュー、ゴフ(Gough)臥烏古新に陸兵の司令官に任ぜられ三月二日を以て香港に着し十八日廣東附近に兵を進めて大砲四百六十一門を奪ふ。清軍の方に於ては皇姪奕山これより先靖逆將軍に任ぜられ參贊大臣隆文、楊芳等と兵五萬を率ゐて四月十四日廣東に着す。五月十七日エリオット攻撃の部署を定め二十四日女王の誕辰日を以て英の海陸兩軍並び進みて廣東に向ひ同地に上陸して先其商館を回復す。翌日廣東市の後方なる堡壘並に兵營を襲ひ頗る激烈なる抵抗を受けしも砲戦一時間の後清軍を破りてその兵營を焼く。此の夜英軍露營を試み二十六日府城の砲撃に着手し、が偶々降雨あり翌朝戰鬪を開始せんとするに際し公使エリオットの使者あり曰く清人廣東市の賠償として六百萬弗を拂ひ清將奕山楊芳等其兵と共に府外六十哩の地に退却せんとす。乞ふ攻撃を中止せよと。蓋し果

勇侯楊芳以下の猛將も將軍ゴフの精銳に敵する能はず此屈辱の議に出でしなり、然るに日ならずして清兵と市民との間に争鬪を生じ全市大亂其慘狀を免れしめんとせる英國公使の盡力も徒勞に歸せり。且休戦の後二日無頼の徒凡一萬五千平英國と稱し英軍の屯在せるもの減じて五百人に過ぎざるを見急に起りて之を襲ひしがゴフ將軍寡兵を以て之を却く三十一日五百萬弗の授受濟み翌六月一日英軍廣東を撤す此役英軍死者僅に十四人に過ぎず而して清軍の戦死者は二月虎門フーメン攻略以來五百人を下る事なかる可し。

七月十六日廣東の通商は舊に復し、が英軍は戦勝の勢に乗じて北進して北京政府と交渉を開かんとし、が公使エリオット並に新に援艦を得て印度より歸來せるブレームルは共に暴風に遭ひて其乗船難破し僅に身を以て免る。新任大使スア、ヘンリ、ポッチンジャー Pottinger (僕鼎查) 海軍少將ウイラム、バアカア Parker 共に英國より直航の漁船に乗じ航海六十七日八月十日を以て來着し代りて其任に就く。スア、ヘンリはヘラットの圍城の時勇名を現はし、エルドレッド、ポッチンジャーの長兄なり。八月二十一日ゴフ并にバアカアの兩將軍艦九隻、漁船四隻、運送船二十三隻外

に測量船等を統べ三千五百の兵士を率ゐて北上し二十五日を以て厦門に若し翌日海岸の砲臺を奪ひ二十七日全く之を占領す。乃ち城中の兵器を悉く船中に移し五百五十人の軍隊と三隻の艦隊とを留めて古浪嶼島を守らしめ更に北進す。九月二十八日英國艦隊は復舟山列島に若し定海の港口に碇泊し、が二月英軍退去以來同島は大に其面目を更め防備嚴なり。總兵葛雲飛、鄒國鴻、王錫明等將士を指揮して英軍に抗す。十月一日陸戦隊先上陸し勇敢なる清軍の抵抗を受けしが守將多く戦死して城復英人の有に歸す。英人此地に民政部を置きて人民を安堵せしめ兵四百を留めて守備隊に充て軍艦に搭じて鎮海城に向ふ。

鎮海に於ては伊里布の後任者裕謙總督兼欽差大臣として防禦の任に當り諸將を督す。十月九日英艦城下に若し翌朝戦員二千二百人大砲十二門を以て上陸し、かは清軍五千之を拒ぎしも戰略一致せずして全軍敗北し殊に溺死するもの多く千五百人を失ふ。裕謙軍の利なきを見自ら水に投せんとして従者に碍げられ一旦寧波を越へて遁走し、も次て毒を仰ぎて自殺す。英軍勢益々壯にして直ちに錢塘江を溯り十三日を以て寧波府に若し一舉之を攻略す。蓋し英軍の至るや清將は已に遠

く遁れて杭州に赴きしを以て一の抵抗を試みるものなく市民は其門戸に順民なる文字を記して閉居するものあり寧波陥落の後將軍ゴフは暫らく士卒を休息せしめ大使ポッチンジは翌西紀一八四二年道光二年二月に至り香港の占領地に事ありしを以て南歸す。

清帝は定海鎮海廈門寧波の陥落を聞きて大に怒り上諭を發して諸臣を督し吏部尙書奕經を揚威將軍に任じ浙江に至りて英軍を伐たしむ西紀一八四二年道光三年上旬鄭國鴻の遺子鄭鼎臣なるもの英軍の内地侵入を計畫せるを探知し先其本據を奪はんと欲し一萬餘人を以て定海を襲ひしが克つ能はず十日を以て寧波に至り前日より兵士をして服裝を變じて市内に入らしめ内外相應じて英軍を驅逐せんと試みしが又功を奏せず戦死者六百人に達す而かも英軍の死者僅に一人のみ清軍轉じて鎮海に向ひしも又利なく退て慈谿縣に軍す十五日英軍一千五百人軍艦の便を假りて之に向ひ先第一營を抜き翌日容易に第二營を占領し十七日を以て寧波に歸る已にして四五月の間英軍の援兵陸續として到着しを以て杭州府侵襲の策を變じ五月七日將軍ゴフ寧波並に鎮海の軍營を撤し全軍を統率して乍

浦に向ひ十七日同地の附近に碇泊す蓋し新任印度總督エレンバル卿の訓令に基き長江を略して清國の死命を制せんとするの策に基きしなり伊里布時に復用ゐられて此方面の防備に任じ清兵六千三百人滿兵千七百人城中に在り英軍の陸戦隊翌日を以て上陸し十九日高地を占めて海軍と相應じて砲門を開く城の副將洪某と云ふ者伏兵を設けて奇功を收めしが又頽勢を挽回するによしなく城遂に下る將軍ゴフ數日間城中に滞在して將士の勞を慰し堡壘兵器等を破壊して再び軍艦に搭じ六月十三日楊子江口に着す吳淞の守備隊士氣振はず戦はずして走りしを以て十六日英軍同地を占領し兵を上海縣に進む提督陳化成なる者清軍を督し勇を奮ひて戦ひしが飛丸に中りて斃れ部將戦死するもの多く縣城陥る時に十九日なり清人の書に曰く化成初め勇名あり英人江南百万の兵を懼れず唯一人の陳化成を恐るといへりと今も上海に化成の坐像あり香火常に絶えず。

六月廿三日英軍上海を撤す此日大使スア、ヘンリ、ポッチンジ、香港より軍に歸りソールトン卿の援軍も亦來會しを以て長江を溯りて鎮江府を攻め運河の交通を遮断するの策を決す七月六日七十三隻の艦隊六隊に分れ五隻の小隊を以て前驅

となして楊子江を航進し第一着手として團山崗の砲台を抜き廿日を以て鎮江府外に達す。府は江の南岸を距る半哩の地にありて南北支那交通の要衝なり。ゴフ將軍全軍七千を三隊に分ちてバルトレイ、ソールトン卿、シヨッドの三將をして各之を率ゐしめ外に五百七十人の砲兵隊を置き親ら全軍を指揮す。守備の任に當れる清兵其數三千餘將軍齊愼都統海齡之を統率す。假令攻守其勢を異にすとは云へ勝敗の數推測するに難からず思ふに清國政府は英軍の此舉あるを期せざりしならむ。翌二十一日ソールトン卿の右翼先城外の兵を破り次でシヨッドの中軍は城北の清軍を破りて西門に向ひバルトレイの左翼も亦稍、逃れて來會す。然るに城兵南方に集合して激烈なる抵抗を試みしが將軍ゴフ大砲を以て南門を破り兵を城内に進入せしめしかば將軍齊愼は重傷を負ひて逃走し都統海齡は身を火中に投じて死し交戦二時間の後城全く陥落す。英軍戦死者三十七人負傷者百三十一人に達す。乃ちシヨッドの一隊をして守備に當らしめ更に長江を溯り八月四日先頭隊已に南京に近づき九日全軍府外に達す。

#### 第四節 南京條約并に補遺約款

南京は楊子江を距る三哩の地にあり六朝の建康明代の舊都にして人口百萬と稱す。其繁華北京に亞ぎ南清に於ける最も樞要の地なり。故に城中の戍兵凡一萬五千に達し内六千は滿洲兵なり。英軍僅に四千五百に過ぎず。雖も連勝の餘士氣大に奮ひ十一日ソールトン卿の枝隊先上陸し十五日の天明を待ちて將に一大打撃を此東洋の羅馬市に加へんとす。是より先鎮江城の下るや清帝俄に恐怖の念を生じ初めて中心媾和を欲するに至れり。乃ち欽差大臣耆英並に伊里布等に命じて其意を英軍に通せしむ。耆英は帝の外叔父にして三月勅命を以て廣州將軍に任せられしが浙江地方事急なるを以て乃ち同地に止まりしなり。而して伊里布は已に乍浦副都統の任にありて媾和の事に當りしが大使ボッチンジャ其全權の委任なきを以て會商を拒みしかば清帝更に耆英伊里布並に兩江總督牛鑾を全權大臣となす。但し奕山は固より總轄の任にありしも廣東にありて議に與るを得ず。牛鑾乃ち七月二十九日を以て書を鎮江在留の英國大使に送り八月十二日耆英伊里布共に南京に若しを以て十四日の夜英軍の將に其砲門を開かんとせる三時間前に於て三全權よ

り復た書を大使に送り翌朝を以て會見せん事を請ふ。大使熟慮の後之を許し、かば南京の舊都は僅に破壊を免れしが十年ならずして長毛賊の蜂起あり終に大打撃を免るゝ能はざりき。

此時流言あり清國政府は壽春縣に勇兵を募りて英人の後を断たんとすと、將軍ゴフ大に怒り直ちに南京の郭外なる鐘山の頂に大砲を運搬し一撃の下に府城を粉碎するの準備を爲し、が耆英キイ百方辯解を試み事辛く止む。十九日耆英キイ伊里布イリブ牛鑿ニウゼンの三全權隨行員と共に英艦コルンウリス號を訪ひて大使ポッチンジャ並に海陸の兩將バアカア、ゴフと會見し翌日休戦の約成る。二十四日大使答禮の爲府外の一寺院に支那全權を訪問し二十六日復耆英並に伊里布と府内の學堂に相會して商議す。蓋し八月二十六日は鴉片戦史と偶然の關係を有し西紀一八三九年林則徐が英人を澳門より放逐し、も此日なり、西紀一八四〇年英國大使が白河々口に至りしも此日なり、西紀一八四一年英軍が廈門を占領し、も此日なり、越えて三日清國全權復コルンウリス號に至り艦中に於て媾和條約を調印す。所謂南京條約是なり時に西紀一八四二年八月二十九日道光二十二年七月二十四日なり。清國全權中伊里布

殊に盡力し此日の如き重患を冒して來會す。調印終り英艦二十一發の祝砲を放ち英清兩國の國旗をコルンウリス號の檣頭に翻へす。茲に於て戰鬪全く終結す。

條約の要項を擧ぐれば下の如し。英清兩國は將來平和を維持すべし。(一)支那政府は軍費として一千二百萬弗英商に對する負債償却として三百萬弗鴉片賠償として六百萬弗總計二千一百萬弗を西紀一八四五年の歲末までに英國政府に拂渡すべし。(二)廣東、廈門、福州、寧波、上海の五港を開きて英人の通商並に居住を許し、獨りに關稅を課せざる可し。(三)香港の主權を英國政府に讓渡すべし。(四)捕虜となれる英人を無條件にて釋放す可し。(五)戰役中英人の下に服役せる清人の罪を問はざるべし。(六)將來兩國間往復の文書は對等の文字を用ゆべし。(七)條約、皇帝の認可を経且償金の内六百萬弗の受渡濟まは英軍は當時占領せる長江沿岸の地等より撤兵すべし。雖も定海縣テイハイの舟山島並に廈門廳アモイの古浪嶼島コウラクは條約の規定悉く實施さるる迄占領すべし。(八)而して六百萬弗の授受直ちに濟み皇帝の認可も九月八日を以て行はれ其報同十五日を以て到着し、かば英國大使は即日江寧を引揚げ長江碇泊の英艦十月中悉く定海縣に集合す。次で舟山の守備隊二千古浪嶼の守備隊千香港の戍兵

千七百を配置し十二月將軍ゴフ印度に向ひて香港を發す。此戰役中英軍の損失三千の上に出でしと云ふ。將軍ゴフはバアカアと共に功を以て准男爵に叙せられ其他の諸將も皆賞を受け公使ポッチンジは香港太守兼陸軍大將に任せらる。是より先英國の運送船一隻鴉片商船一隻臺灣島の近海に於て暴風に遭ひて難破し地方官の命令を以て虐殺せらる。ポッチンジ報を得て清國政府に詰りしに清廷驚愕直ちに其官吏を誅し者英を遣して陳謝す。初め南京條約の成るや厦門上海寧波等の人民は戦争の終結して其地の互市場となりしを喜びしが恃り廣東の人民は然らず英人に對して敵意を抱く事故の如し。偶々下等社會のもの英人の勞働夫と争ひて負傷しより同類群を爲して英國商館を圍み火を放ちしに市民之を援ふの爲して却て暴徒を助けしかば火勢却て熾になり治む可らず。官吏暴徒を制する能はず之を英國官吏に報じしかば英軍の香港に歸らんとして洋中にありしもの來會して悉く兇徒を捕縛す。伊里布通商約款會商の命を受けて欽差大臣廣州將軍の職を以て廣東府に來着し土人に諭して深く其將來を戒しむ。香港知事ポッチンジ伊里布來ると聞き大に喜び廣東以外の四港開放に關し條約締結の交渉を開か

んと欲ししが三月四日伊里布病床に仆る時に年七十二歳なり。伊里布の父は乾隆帝の從弟なりと云ふ。

南京條約の批准は西紀一八四二年の末日を以て行はれ翌四三年道光三月十六日飛使これを携へて香港に着す。清廷耆英を以て伊里布の後任と爲し英の大使と共に通商條約の事を議せしむ。耆英六月四日を以て廣東に着し三週間の後ポッチンジを香港に訪問し月の二十六日五、二を以て批准の交換を行ひ香港は初めて公然英領となる。次で關稅其他通商上の規定に關する交渉成立し七月二十二日耆英并にポッチンジ各之を其臣民に公布す。此に於て廣東以外の四港も亦廣東と同じく貿易港となる。次で補遺條約の交渉全く成り十月八日五、一兩全權虎門鎮に於て之に調印す。全條十七ヶ條より成りて南京條約の附録として關稅其他の細目を規定し、ものなれども小形船舶の航海を規定せる最後の條項は新に置きしものなり。而して此規約中最も重要なるは所謂最惠國の理由によりて五港を他の外國人に開きしにあり。

南京條約一度公布さるゝや歐米の商業世界は大に之を歡迎し白耳義和蘭普魯士



西班牙葡萄牙等相次ぎて領事若くは公使を廣東に派す。而して佛蘭西亞米利加の兩國は殊に支那に向けて特命全權公使を任命せり。米國公使ケレブ、グッシングは大統領タイラーの國書を携帶して西紀一八四四年<sup>道光四年</sup>二月二十四日を以て支那に着し北京に至るの意を通じしが支那政府は耆英に全權を委任して會商せしむ者。英乃ち澳門に至りて其郭外の地に寓居を定め米國公使と交渉し七月三日米清間の條約調印を経て成立す。是より先英國大使ポッチンジは功成り名遂げ後任者デ井スに事務を引繼ぎ六月を以つて香港を去りて歸國す。ルイ、フィリップ並にギンズの派遣し、佛國公使ツラグレネは八月十四日支那に來着し又耆英と協商して十月二十三日黃埔に於て其條約に調印す。茲に於て歐米諸國との條約は全く結了す。西紀一八四六年<sup>道光六年</sup>一月支那政府は約の如く其償金の殘額を完済し、かば同年四月四日<sup>三</sup>香港太守スア、フランシス、ダ井ス並に兩廣總督耆英は虎門に於て各全權を帶びて協商に調印し英國政府は廣東市内住居實施の延期を諾し支那政府は將來舟山列島を外國に割讓せざるを約し、後七月ダ井ス親ら定海縣に至りて同地を支那政府に引渡し尋で厦門の守備隊を召還す。

### 第五節 回疆七和卓木の亂並に長毛賊の擧兵

鴉片戦争の結果滿洲政府が外國と戦て一敗地に塗れ割地の屈辱を受けしを見て漸く其統治の力を疑ひ所謂鼎の輕重を問はむする者あるに至れり。今第七章第八節に繼續して回疆七和卓木の亂を略叙し次で清朝一代教匪の魁たる長毛賊の沿革を述ぶ可し。

道光二十二年<sup>道光二年</sup>敖罕王ムハメッドアリ布哈爾王と戦ひ利あらずして敗死し數年の後其一族クイダマルなる者敖罕の王位に即さしが前王の養成せる尙武の精神を利用しての力量なし勇敢なる領内の民乃ち張格爾の遺子に説きて父の爲に報復の師を興し回疆地方より支那人を驅逐せん事を以てし、にカタハン以下同族七人皆之に従ふ故に是を七和卓木の亂と稱す。道光二十五年の終に當りて宣戰の布告を發して同志を糾合しキルキズ族をはじめ遠近無頼の徒を集め二十七年のはじめに至りて東進す。ミンユイ寨の戍兵一百之に抗する能はずして破れ且喀什噶爾駐在の敖罕監商官ナメット住民を煽動して城門を開かしめしを以て城長カン

ム等漢城に投じてカタハン直に喀什噶爾に據る。而かも回疆の諸城前年の事に懲りて之に應ずるものなく十一月に至りて葉爾羌を攻めしか却て清兵の破る所と爲り退きて喀什噶爾に入らんとすれば住民門を閉ぢて容れず蓋し同地滞在中甚た不法の處置を行ひ其怒を買ひしを以てなり。時に伊犁の清兵も復瑪刺爾巴什より進みしを以てカタハン少しく之と戦ひ遂に又散卒に奪る。此時林則徐陝甘總督の任にあり間接に鎮壓に與りて力ありしと云ふ。蓋し則徐は前年廣東の事變より其職を免せられて伊犁に謫せられしが出發の途に於て黄河決堤の報に接し修理の命を受け次て道光二十五年の末功を以て現職に補せられしなり。

道光三十年正月十三日西紀一八五〇年二月二十五日道光帝病甚た篤く親王大臣を臥床に集め第四子奕訢を立て、皇太子となし次で崩す年七十。皇太子立ちて翌年を以て咸豐と改元す之を文宗顯皇帝と云ふ。文宗踐祚の年八月洪秀全なる者兵を廣西省桂平縣の金田に起して亂を爲す。洪秀全は廣東を北に距る凡三十哩なる花縣の一農家に人と爲り其出生の年は嘉慶十七年なり。其家は初め江西の境上より移住せる客家種族にして本地種族と相容れず。秀全七歳の時より郷校の學堂に入りて學を修め數回

試業に應じ、が遂に舉人たる能はず遂に身を教育界に投じしとも云ひ或はまた卜筮を賣りて江湖の間に漂泊し、とも云ふ。是より先廣東に朱九濤なる者あり親ら明朝の遠裔なりと稱し基督の教即ち上帝教を唱へ其教會を三點會 Triad と名け以て愚民を惑はす。秀全乃ち同邑の馮雲山なる者と九濤を師とし其死後推されて教主となる。道光二十四年秀全雲山等其徒二名を伴ひて廣西省潯州府に至り貴縣の山中なる親戚を訪ひ雲山は其附近に止まりて布教に盡瘁す。二年の後秀全は廣東在留の米國牧師ロバルツに就きて教を受け再び廣西に赴き雲山の徒大に振ひ其數二千に及ぶを見初めて之を中堅として滿洲政府に謁願せんと欲するの志を抱けり。

廣西地方叛亂蜂起の徵候は已に道光十年以來より之あり二十七年廣西廣東兩省の地飢饉甚しく所在群盜其暴を逞くするや巡撫鄭祖琛頗る之が制御に苦む。會湖南の逆民に雷再浩と云ふ者あり粵に入りて其各州を横行し盜掠至らざるなし。二十九年逆匪李沅發兵を唱へて貴州の邊界を擾し、が翌年官軍之を擒にす。已にして道光帝崩御の報至りしかば粵地の叛魁陳亞發、歐祖潤等相響應して兵を舉げ

白布を以て大旗を作り天厭滿清朱明再興等の文字を書す。初め秀全雲山の居を桂平武宣二縣の界なる鵬化の山中に定めて布教を事とするや桂平の豪富曾王珩先其門に入りて教を受く。秀全の妹婿武宣の人蕭朝貴亦桂平に來り楊秀清と親交す。秀清は其先廣東の人なるが廣西に移りて桂平の大黃江に居り種山燒炭を業とし、が同邑の人韋昌輝貴縣の石達開と共に上帝の教に入る。時に秀全偶病に臥して殆ど死に瀕し、が愈むて後曰く吾病中一たび死し、を以て將來の事を知るを得たり我教を奉じ上帝を拜し教主の爲に戦はん者は特り幸福を受くるを得べし香銀銀五兩を納めてはじめて入會するを得べしと其徒益盛なり。其教に入る者は師徒と稱せずして男は兄弟と云ひ女は姉妹と云ひ雲山等皆秀全に兄事す。秀全乃ち名を西教に托し親ら天父の名目を撰み天父を耶父エホバ華と名け耶蘇を以て長子とし親ら次子となり彼を天兄と稱す。此年七月雲山秀清等と眞言寶詰等の諸書を造りて密に之を傳布し髪を蓄へて山林の間に潜伏し人を四方に出して勝説せしめしかば各邑人心傾動し附従する者日に多し。其重なる者は貴縣の林鳳祥廣東の羅大綱湖南の洪大全等なり。其髪を蓄ふるを以て支那人は之を長毛賊と稱し歐米人は其

立てし國号によりて太平賊と稱す。巡撫鄧祖琛時に陳歐の輩を征討し其師を督して平樂州にありしが金田に於ける擧兵の報に接し罪を懼れて之を上奏せず。九月固原の提督向榮廣西の省城桂林に至りしに時に慶遠思恩南寧等各地の土匪共に起りて官軍に抗し、かば秀全等の勢益振ふ。祖琛初めて寶を朝廷に上奏す。兩廣總督徐廣縉叛徒を鎮壓するの器にあらざるを以て林則徐を擧げて欽差大臣となし馳せて廣西に赴き向榮並に雲南提督張心祿等と會剿せしむ。蓋し祖琛は此前後に於て欺飾彌縫の罪を以て其職を免ぜられしなり。則徐命を奉じて急行潮州に至りて病甚しく竟に廣寧館に死す。十月更に前兩江總督李星沅を以て欽差大臣となし桂林地方に至りて軍務を督せしむ。十一月張心祿平南金田の邊に於て戦死し、かば星沅總兵周鳳岐副將伊克坦布をして兵を以て之を援はしめしが廣東の民數千人敵に加はり伊克坦布も亦戦死す。十二月前漕運總督周天爵をして廣西の巡撫たらしむ。咸豐元年正月秀全金田を發して大黃江に到り十八日向榮と戦ひて之を破りしより軍威益振ひ遂に乘に推されて太平王と稱し進みて象州の境に到る。二月廣州の副都統烏蘭太會剿の命を受けて廣西に赴く。

三月北京政府秀全の勢甚だ熾なるを見て大學士賽尙阿サイヤンアを欽差大臣となし正副都統巴清德達洪阿を率ゐ京師の精兵を領して征討に従事せしむ。賽尙阿等四月九日を以て北京を發す發するに臨み皇帝親から過必隆と名くる寶刀を授け内庫銀一百萬兩を與へ以てその行を壯にす。此月李星沅病死す。六月賽尙阿桂林に若し各州の兵勇三萬餘人を糾合して敵の巢窟を破り七月進みて象州境内の敵營を攻め烏蘭太以下諸將奮戦して要害を奪ひ翌月韋昌輝の弟韋亞孫等を斬りしも向榮の枝隊破れしを以て革職せらる。此月巴清德平樂に死す。閏八月一日西紀一八二七秀全轉して永安州を陥れ國號を太平天國と稱し親ら天王と爲り楊秀清ヤウシウチンを東王蕭朝貴を西王馮雲山フンユンサンを南王韋昌輝を北王石達開シカクを翼王洪大全を天德王と爲し秦日綱羅亞旺、范蓮德、胡以晃等四十八人を丞相軍師の職に任じ有功の將士八百餘人に悉く位階を授く。當時秀全が一舉して廣東府に向はさりしは烏蘭太がよく梧州方面を厄しを以てなり。咸豐二年二月十八日烏蘭太仙回岑を攻めて洪大全を擒にし、が長驅して敵彈に斃さる。

## 第六節 長毛賊の北進南京の陥落

秀全永安の本據にありて攻撃を受くる事五ヶ月。此年二月十八日西紀一八二七。斷然進取の計を定め全軍を三隊に分ちて直ちに桂林に向ひ之を圍む。五、一城中官民固守して動かず且逆襲を試みて大に賊兵を破りしを以て同地を捨てて直ちに湖南に向はんと決し夜に乘じ圍を解きて北に去る。四月東王楊秀清等興安より全州を攻む時に湖南の都司武昌顯、知縣と共に之を守りしも地雷を以て城壁を轟破されしが爲城遂に陥る。南王馮雲山勝に乗じて湖南に入り敗兵を追ひて長沙に向ひしが湘江の知縣江忠源兵を募りて之を鎧衣渡に邀へ激戦二晝夜の後雲山を殺す。雲山は賊徒中最も教育あり實に其謀主たり。敗兵狼狽船を乘て、東岸に上り道州に走る。五月秀全全軍を悉して道州に進みしかば提督余萬清直ちに城を棄て、走り道州降る。六、一。六月秀全道を江華寧遠、嘉禾の諸縣に取り總兵和春、常祿等と戦ひ遂に桂楊州を攻めて之を抜く。七月江忠源之を克復せんとし力戦して城下に迫りしに秀全已に城を出で、彬州を奪ふ。彬州は湖南廣東の通路にして殷富の市なり。忠源諸軍を會して其三門外に壘を設け相持する事旬餘に及びしも竟に抜く能はず。而して

西王蕭朝貴此月を以て死黨を率ゐて榮興、茶陵、醴陵等を略して長沙に至る。提督鮑起豹在籍巡撫羅繞典死守して助かず。新任湖南巡撫張亮基も亦雲南より來會して城に入り防戦大に努めしかば八月朔貴遂に其南門に戦死す。秀全、秀清等之を聞きて大に怒り兵を悉して來り攻め土壘を築きて長圍の計を爲す。是より先提督向荣軍事に長ずるを以て亦用ゐられ秀全を追ひて來會し翌九月初旬官軍各路の兵も亦皆集る。秀全復び地雷を用ゐて城兵を苦めしが其容易に下らざるを見十月十九日<sup>三一〇</sup>遂に夜に乗じて圍を解き浮梁を作りて湘水を渡り寧鄉より益陽に至り追將紀冠軍を破りて之を殺し船を奪ひて洞庭を渡り岳州に至る。二十七日湖北提督傅赫恭武戦はずして遁れ岳州賊の有となりしを以て故吳三桂の軍器皆其奪ふ所となる。秀全民舟五千を奪ひ之に乗じて遂に東下す。

十一月七日秀全官軍の虛に乗じ急に漢陽府を攻む副將朱濬、知府董振鐸皆戦死し十二日<sup>二二二</sup>に至り諸鎮悉く下る。漢陽は本部支那の中腹に當り百貨堆積の地なるを以て之を遷移するの邊なく火を市街に放ちしを以て六晝夜の間火滅せず。秀全直ちに武昌を圍みしに城中巡撫常大瀉數百の兵を督して防戦す。向荣賊を追ひて來

會し十二月三日武昌門外に激戦して勝利を得しも翌四日<sup>西紀一八五</sup>地雷の謀其功を奏して武昌も亦賊の手に落つ。咸豐三年正月是より先帝賽尙阿の久しく功無かりしを以て之を責問し兩廣總督徐廣縉を以て欽差大臣となし湖南に赴かしめしが賊勢の盛なるに恐れ岳州にありて敢て進まず。乃ち又其罪を責問し提督向荣并に前大學士琦善を以て欽差大臣となし直隸陝西黑龍江三省の兵十餘萬を督し河南に赴きて秀全を防かしむ。此月二日秀全其擒にせる男女六十萬船舶一萬を以て長江を蔽ひて東に下るに過る所黃州、武昌、蕪水、蕪州皆降る。同十一日廣濟縣を衝き武穴鎮を陥れしかば兩江總督陸建瀛一たび破れて復戦ふ能はず。從者十七人を以て身を脱して金陵に走りしを以て秀全其兵二萬餘人を降し船二千餘隻を奪ふ。十七日<sup>二二一</sup>秀全九江を陥れ次で安慶府城を下し<sup>二二五</sup>巡撫蔣文慶等を斬り守兵萬餘人を降す。二十四日太平府を取り二十七日<sup>二二六</sup>蕪湖を陥れ二十九日遂に金陵に迫り城外壘を築く事二十四坐船艦を列ねて新州より七里州に至り環攻晝夜を別たす。二月六日城中彈丸已に盡き石を大砲に填裝するものあるに至れり。右邊開は死士を督して地雷を埋めしに八日<sup>二二七</sup>聚寶儀鳳二門の地雷一時に發し城中

大に亂れしかば達開等大隊を提げて城中に入り總督陸建瀛提督福珠等亂軍の中に戦死す將軍祥厚副都統霍降武等滿洲兵を指揮して内城をまもり城中婦女に至るまで賊を防ぎ相持する事二晝夜に及びしが賊兵風に乘じて火を放ちしかば城遂に陥り祥厚以下皆戦死す秀全城兵の久しく抗守しを憤り城中の兵民四萬餘人を屠り十六日獲る所の資財を散じて大に將士を賞し盛宴を張る同二十一日<sup>四〇</sup>。林鳳祥等鎮江府を陥れ二十三日又揚州府を下し勢に乗じて浦口瓜州の要隘を占め土壘を築きて南北兩路の官軍を阻隔す。

此時に當りて秀全已に金陵を陥れて長江の險に據り兵士を練り器械を製し多く金銀糧食を蓄へ精兵銳卒十餘萬を擁し親ら明朝の正嗣として全國に臨む而して其宮室及び諸王の殿屋に至るまで煩る壯麗を極め制度律令多く泰西の法に倣ひ且基督教を摸し日々高殿に上り衆を集めて教を説き日常起居飲食に至るまで一として教理に基かざるはなし其最も見る可き者は多く自由を主とし婦人の拘束を解きて交際の風習を一變し下等人民の蓄妾を禁じ又娼妓を禁じ之を犯す者は罰あり其他或は婦人の馬蹄足を禁じ或は奴隸賣買を禁じ或は婚禮の式を定めて僧正の前

に於て之を行はしめ或は養育院を設けて從軍の貧家族等を養育す此に於て來從する者日に多く其兵の向ふ所前なく戦へば必ず勝ち攻むれば必ず取る各省の年少壯士豪富の輩亂を思ふ者風を聞きて響應し贈るに金錢を以てし稱して進貢と云ふ廣東の凌十八溫大賀五等の如き湖南岳州の晏仲武の如きは其重なるものにして衆六七万を擁す是を以て各省震動し天下騷然たり皇帝震襟を惱まして寢食を安んぜず廟堂策の出る所を知らず實に吳三桂以來の大亂と稱すべし但し南京陷落以後の事は時期の分割上後篇に記述するを以て適當なりとす故に茲に前篇の筆を結ぶ。

東邦近世史上卷 終

附録第一

和漢洋紀年比較附日支葡西英蘭佛露帝王年表

日本年號	天皇降號	支那年號	支那皇帝	西紀	葡萄牙	西班牙	英吉利	和蘭	佛蘭西	露西亞
明應七	御土御門	弘治二	明孝宗	一四九八	マノエル (アノ井ス)	………	ヘンリー (チユール)	………	ルイ (アロー)	イナ (アアン)
文龜元	後柏原	一四	………	一五〇一	………	………	………	………	………	………
永正元	………	一七	………	一五〇四	………	………	………	………	………	………
二	………	一八	………	一五〇五	………	………	………	………	………	………
三	………	正徳元	武宗	一五〇六	………	………	………	………	………	………
六	………	四	………	一五〇九	………	………	ヘンリー	………	………	………
九	………	七	………	一五二二	………	………	………	………	………	………
一二	………	〇	………	一五二五	………	………	………	………	………	………
一三	………	一一	………	一五一六	………	………	………	………	………	………
大永元	………	一六	………	一五二一	………	………	………	………	………	………
二	………	新靖元	………	一五二二	………	………	………	………	………	………
七	後奈良	六	世宗	一五二七	………	………	………	………	………	………

附録第一

附録第一

日本年號	天皇隆盛號 (德川將軍)	支那年號	嘉靖七	支那皇帝		西紀	一五二八	葡萄牙		西班牙		英吉利		和蘭		佛蘭西		露西亞	
天正元	二	隆慶元	四	神宗			一五七三									アンリ三			
元龜元	〇	隆慶元	四	穆宗			一五七〇												
永祿元	三	隆慶元	三九				一五六〇												
正親町		隆慶元	三八				一五五九												
		隆慶元	三七				一五五八												
		隆慶元	三六				一五五七												
		隆慶元	三五				一五五六												
		隆慶元	三四				一五五五												
		隆慶元	三三				一五五三												
		隆慶元	二六				一五四七												
		隆慶元	一一				一五三三												
		隆慶元	一一				一五三二												
		隆慶元	一一				一五二八												

附録第一

元和一	八	後水尾	四三		一六二五														
一七	後水尾	四一		一六一三															
一五		四〇		一六一二															
一〇	(秀忠)	三八		一六〇〇															
八	(家康)	三三		一六〇五															
三		三一		一六〇三															
慶長元		二六		一五九八															
文祿元		二四		一五九六															
一七		二〇		一五九二															
一五	後陽成	一七		一五八九															
一二		一五		一五八七															
一一		一三		一五八四															
九		一一		一五八三															
八		九		一五八一															
六		六		一五八〇															





附録第一

日本年號	支那年號	支那皇帝	西紀	葡萄牙	西班牙	英吉利	和蘭	佛蘭西	露西亞
天保號 (德川將軍)	康熙一五		一六七六	...	...	...	...	...	...
天和元	一九		一六八〇	...	...	...	...	...	...
貞享元	二〇		一六八一	...	...	...	...	...	...
元祿元	二二		一六八二	...	...	...	...	...	...
東山	二四		一六八三	...	...	...	...	...	...
元祿元	二六		一六八四	...	...	...	...	...	...
元祿元	二七		一六八五	...	...	...	...	...	...
元祿元	二八		一六八七	...	...	...	...	...	...
元祿元	二九		一六八八	...	...	...	...	...	...
元祿元	三〇		一六八九	...	...	...	...	...	...
元祿元	三一		一六九四	...	...	...	...	...	...
元祿元	三二		一七〇〇	...	...	...	...	...	...
元祿元	三三		一七〇二	...	...	...	...	...	...
元祿元	三四		一七〇四	...	...	...	...	...	...
元祿元	三五		一七〇六	...	...	...	...	...	...

附録第一

日本年號	支那年號	支那皇帝	西紀	葡萄牙	西班牙	英吉利	和蘭	佛蘭西	露西亞
正徳元	五〇		一七一一	...	...	...	...	...	...
正徳元	五一		一七二二	...	...	...	...	...	...
正徳元	五二		一七二四	...	...	...	...	...	...
正徳元	五三		一七二五	...	...	...	...	...	...
正徳元	五四		一七二六	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七二七	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七二八	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七二九	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七三〇	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七三一	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七三二	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七三三	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七三六	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七四〇	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七四一	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七四四	...	...	...	...	...	...
正徳元	五五		一七四五	...	...	...	...	...	...

附録第一

日本年號	延享三 四	寬延元 三	寶曆元 九	一〇 二	一三 一	明和元 八	安永元 三	九 六
(天皇臨幸) (徳川將軍)	桃 園			(家治)	後櫻町	後桃園		光 格
支那年號	乾隆一 二	一三 一	一五 一	一六 一	二四 一	二五 一	二七 一	二八 一
支那皇帝								
四紀	一七四六	一七四七	一七四八	一七五〇	一七五一	一七五九	一七六〇	一七六二
葡萄牙	...	...	...	...	...	...	...	...
西班牙	...	...	...	...	...	...	...	...
英吉利	...	...	...	...	...	...	...	...
和蘭	...	...	...	...	...	...	...	...
佛蘭西	...	...	...	...	...	...	...	...
露西亞	...	...	...	...	...	...	...	...

附録第一

天明元	一七八一	一七八六	一七八七	一七八八	一七八九	一七九二	一七九五	一七九六	一八〇一	一八〇四	一八〇六	一八〇八	一八一〇	一八一四	一八一五
(家齊)															
寛政元	一七九二	一七九五	一七九六	一七九九	一八〇一	一八〇四	一八〇六	一八〇八	一八一〇	一八一四	一八一五	...	...	...	...
享和元	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
文化元	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
支那皇帝	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
支那年號	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
四紀	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
葡萄牙	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
西班牙	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
英吉利	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
和蘭	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
佛蘭西	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
露西亞	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

附録第一

日本年號	文化一三	文政元	三	四	七	八	九	二	元	天保	四	五	八	二	弘化元
(天皇監號)	仁孝	道光元	二五	三	三	二	二	二	二	(家慶)	一〇	八	六	五	二四
支那國號	嘉慶二一	宣宗													
支那皇帝															
西紀	一八一六	一八一七	一八一八	一八二〇	一八二一	一八二二	一八二四	一八二五	一八二六	一八二八	一八三〇	一八三三	一八三四	一八三七	一八四〇
葡萄牙	ヨアン六								ベドロ四 マリア二	ミゲル一					
西班牙											イサベル二				
英吉利												ム四	井ルリヤ	ア井クトリ	
和蘭															二井ルレム
佛蘭西															
露西亞															

一〇

嘉永元	二	四	五
孝明			
成豐元	二九	二八	二七
文宗			
	一八五二	一八五一	一八四九
	一八四八	一八四七	
	……	……	……
	……	……	……
	……	……	……
	……	……	……
	……	……	……
第二共和	三井ルレム		
ナポレオン三			

附録第一

一一

附錄第二

支那布教々士姓名洋漢對照表

Aleni, Giulio.	艾儒略	會、伊人、一六二三年。一六四九年八月三日福州に死す。年六七。學徳高く泰西之孔夫子の稱あり
Bahr, Florian.	魏繼晉	會、獨人、一六七八年。
Barelli, Agostino.	艾斯訂	一七七二年六月七日北京に死す、年六五 會、伊人
Benevente, Alvaro de.	白	一七〇七年頃杭州地方に布教す ア派、西人
Bonjour.	潘如	一六八〇年支那に來る ア派、佛人
Bouvet, Joachim.	白晉(進)	一七一二年頃測量に従事す 會、佛人、一六八七年。
Boym, Michael.	卜彌格	一七三〇年六月二十八日北京に死す、年七四 會、波蘭人、一六四三年。一六五〇年明の使者として羅馬に赴く 一六五九年廣西に歿す。年四八
Brancati, Francesco.	潘國光	會、伊人、一六三七年。 一六七二年四月二十五日上海に死す。年六四
Brollo, Basilio.	葉宗賢	ア派、伊人、一六八四年。 一七〇四年七月一六日西安に死す
Buglio, Luigi.	利類思(斯)	會、伊人、一六三七年。 一六八二年一〇月七日北京に死す。年七六
Cardoso, Francisco João.	麥大成	會、葡人 一七七一年頃測量に従事す

附錄第二

- Castiglione, Giuseppe. 郎世寧 會,伊人 一七六四年死す,年七〇餘
- Castner, Gaspur. 龐嘉賓 會,獨人,一六九七年。 一七〇九年一月九日北京に死す,年四四
- Cattaneo, Lazare. 郭居靜 伊人,一五九四年。 一六四〇年一月一九日杭州に死す,年八〇
- Charme, Alexandre de la. 宗君榮 會,佛人,一七二八年。 一七六七年七月北京に死す,年七二
- Chavagnac, Emeric de. 沙守信 會,一七〇一年。 一七一七年九月一四日饒州に死す
- Contancin, Cyrillus. 龔當信 會,佛人,一七〇一年。 一七三三年死す,年六四
- Costa, Ignacio da. 郭納爵 會,葡人,一六三四年。 一六六六年五月廣東に死す,年六七
- Costa, Giovanni Giuseppe di. 羅懷忠 會,伊人 一七四七年死す
- Couplet, Philippe. 柏應理 會,白人,一六五九年。 一六九三年五月一六日ゴアに赴くの途に死す,年七一
- Cunha, Simon da. 瞿西滿 會,葡人,一六二九年。 一六六〇年九月澳門に死す,年七三
- D'Almeida, Joze Bernardo. 索德超 會,葡人 一八〇五年死す
- Dentrecoles, François-Xavier. 殷弘(洪)緒 會,佛人,一六九八年。 一七四一年七月二日死す,年七八
- D'Espinha, Joze. 高慎思 會,葡人 一七八八年死す,年六七
- Des Roberts, Joseph-Louis. 趙類思 會,佛人,一七三七年。 一七六〇年四月二日北京に死す,年五七

- Diaz, Emmanuel. 陽瑪諾 會,葡人,一六一〇年。 一六五九年三月四日杭州に死す,年八五,別號を汝西と稱す
- Diessel, Bernhard. 蘇納 會,獨人 一六五九年北京に來る
- Duarte, Jean. 聶若望 葡人 一七〇〇年支那に來る
- Ferran, André. 郎安德 會,葡人,一六五九年。 一六六一年福州に死す,年四〇
- Ferrari, Francesco. 李方西 會,伊人 一六七二年死す
- Ferreira, Domingos Joachim. 福文高 プ派,葡人 一八二四年死す
- Ferreira, Gaspar. 費奇規 會,葡人,一六〇四年。 一六四九年二月二七日北京に死す,年七八
- Figuerdo, Roderic de. 費樂德 會,葡人,一六二三年。 一六四三年一〇月九日開封府に死す,年四八
- Fontaney, Jean de. 洪若 會,佛人,一六八七年。 一七一〇年死す,年六八
- Fouquet, Jean François. 傅聖澤 會,佛人,一六九九年。 一七二三年死す,年六一
- Frapperie, Pierre. 樊繼訓 會,佛人,一六九九年。 一七〇三年死す
- Fridelli, Xavier Ehrenbertha. 費隱 會,獨人 一七四〇年死す
- Froes, João. 伏若望 會,葡人,一六二四年。 一六三八年七月一日杭州に死す,年五〇
- Furtado, Francisco. 傅汎濟 會,葡人,一六二二年。 一六五八年二月二日澳門に死す,年七一

附錄第二

Gabiani, Domenico.	畢 嘉	會, 伊人 康熙時代に支那にあり
Gerbillon, Jean Francois.	張 誠	會, 佛人, 一六八五年。 一七〇七年死す, 年五四
Gollet, Jean Alexis de.	郭 仲 傳	會, 佛人 一七〇一年頃支那に布教す
Gogisel, Antonius.	鮑 友 管	會, 獨人 一七七一死す
Gouvea, Alexandre de.	湯 亞 立 山	フ派
Gouvea, Antonio de.	何 大 化	會, 葡人, 一六三六年。 一六七七年二月一日福州に死す, 年八五
Gravina, Geronimo de.	賈 宜 陸	會, 伊人, 一六三七年。 一六六二年九月四日漳州に死す, 年五九
Greslon, Adrien.	聶 仲 遷	會, 佛人, 一六五七年。 一六九七年三月贛州に死す, 年七九
Grimaldi, Filippo Maria.	閔 明 我	會, 伊人, 一六八六年露國に使し 一六九二年復命す
Grueber, Johann.	白 乃 心	會, 獨人 一六五九年北京に來る
Hallerstein, Augustin von.	劉 松 齡	會, 獨人 一七七四年死す, 年七二
Herdricht, Christian.	恩 格 理	會, 獨人 一六八四年死す支那にあること三五年
Hervieu, Julien Placide.	赫 蒼 璧	會, 佛人 一七四六年澳門に死す, 年七六
Hinderer, Romain.	德 瑪 諾	會, 佛人, 一七〇七年。 一七四四年八月南京に死す, 年七五

Ignatius	伊 納 爵	ア派
Intorcetta, Prospero.	殷 鐸 澤	會, 伊人, 一六五九年。 一六九六年一〇月三日杭州に死す, 年六八
Jatoux, Pierre.	杜 德 美	會, 佛人, 一七〇一年。
Koffler, Xavier Andrew.	瞿 紗 微	會, 英人, 明の水磨帝の太后等に洗禮を施す 一六五二年死す, 年四九
Kögler, Ignace.	戴 進 賢	會, 獨人, 一七一六年。 一七四六年三月二九日北京に死す, 年六六
Laurifice, Emmanuele.	潘 國 良	會, 伊人, 一六七一年。
Le Comte, Louis.	李 明	會, 佛人, 一六八五年。
Le Favre, Jacob.	劉 迪 我	會, 佛人 一六七一年北京に來る
Lobelli, Giovanni Andrea.	陵(陸)安德	會, 伊人, 一六五九年。 一六八三年澳門に死す, 年七三
Longobardi, Nicolao.	龍 華 民	會, 伊人, 一五九七年。 一六五四年九月一日北京に死す, 年八八。別號精華と稱す
Magalhaens, Antonio de.	張 安 多	會, 葡人 一七二二年葡領牙に使す
Magalhaens (Magallans), Gabriel de.	安 文 思	會, 葡人, 一六四〇年。 一六七七年五月六日北京に死す, 年六六
Maila, Joseph Marie Anne de Moyria de.	馮 乘 正	會, 佛人, 一七〇三年。 一七四八年六月二八日北京に死す, 年七九
Martini, Martino.	衛 匡 國	會, 獨人, 一六四三年。 一六六一年六月六日杭州に死す

附録第二

Mata, Manoel Antonio de.	瞿良士	會、葡人
Melon Guillaume.	隆盛	會、佛人 一七〇七年頃布教す
Medez, Manoel.	孟由義	會、葡人、一六八四年。 一七四三年二月澳門に死す、年八七
Monteiro, João.	孟儒望	會、葡人、一六三七年。 一六四八年印度に死す、年四五
Motel, Jacques.	穆迪我	會、佛人、一六五七年。 一六九二年六月二日武昌府に死す、年七二
Mourao, João.	穆敬遠	會、葡人 一七二七年頃布教す
Münnoz, Pedro.	郭多祿	下派、西人 一七〇七年頃布教す
Noël, François.	衛方濟	會、白人、一六八七年。 一七二九年九月一七日佛國に死す
Ocha, José.	柯若瑟	下派、西人、一六八七年。 一七一九年死す
Ortiz, ou Hortis.	白多瑪	下派、西人、一六九五年。
Pantoja, Diego de.	龐迪我	會、西人、一五九九年。 一六一八年一月澳門に死す、年四七、別號順陽と稱す
Parrenin, Dominique.	巴多明	會、佛人、一六九八年。 一七四一年九月二九日北京に死す、年七六
Pedrini, Theodoric.	德理格	下派、伊人 一七四六年死す
Pereira, José.	李若瑟	會、葡人 一七〇七年頃布教す

Pereyra, Andre.	徐懋德	會、葡人 一七四三年死す
Pereyra, Thomaz.	徐日昇	會、葡人、一六七三年。 一七〇八年二月二十四日北京に死す、年六三
Pinnela, Pedro.	石鐸瓊	下派、メキシコ人、一六七六年。 一七〇四年七月三〇日漳州に死す、年五四
Pires, Cajetanus.	畢學源	下派、葡人 一八二三年欽天監監副となる
Prémare, Joseph-Marie de.	馬若瑟	會、米人、一六九八年。 一七三六年九月一七日澳門に死す、年七〇
Provana, Giuseppe Antonio.	艾若瑟	會、伊人、一七〇七年羅馬に使し 一七一九年支那に復命の途に死す
Regio, Jean Baptiste.	雷孝思	會、佛人、一六九八年。 一七三八年死す、年七五
Rho, Giacomo.	羅雅各	會、伊人、一六二四年。 一六三八年四月二六日北京に死す、年四八
Riberi, Joséo.	李拱辰	下派、葡人 一八二六年死す
Ricci, Matteo.	利瑪竇	會、伊人、一五八三年。 一六一〇年五月一日北京に死す、年五、別號西泰又畸人と稱す
Rocina, João da.	羅如望	會、葡人、一五九八年。 一六二三年三月杭州に死す、年五八
Rodriguez, Andre.	安國寧	會、葡人 一七九六年死す、年六八
Rodriguez, João.	陸若漢	會、葡人 一六三〇年澳門の葡萄牙兵を率ゐて明の内亂を定む
Rodriguez, Simão.	李守謙	會、葡人 一六七九年北京に入る

附録第二



Rougenont, François de.  
 Rudonia, André.  
 Ruggieri, Michele.  
 Sambiaso, Francesco.  
 San Juan Bautista, Manuel de.  
 San Pascual, Augustin de.  
 Santa Maria, Antonio de.  
 Sande, Eduarde da.  
 Schall von Bell, Johann Adam.  
 Seixas, João de.  
 Semedo, Alvaro.  
 Serra.  
 Sickelparth, Ignaz.  
 Silva, Antonio de.

魯日滿 會,白人,一六五九年。  
 一六七六年一月四日漳州に死す,年五二  
 盧安德 會,リトヴィニア人,一六二六年。  
 一六三二年九月五日福州に死す,年三六  
 羅明堅 會,伊人,一五八一年。  
 一六〇七年五月二日伊國に死す,年六四  
 畢方濟 會,伊人,一六一三年。  
 一六四九年廣東に死す,年六七  
 利安寧 フ派,西人,一六八五年。  
 一七一〇年三月一〇日北京に死す  
 利安定 フ派,西人,一六七〇年。  
 一六九五年アカプルコに赴くの途に死す  
 利(粟安堂) フ派,西人,一六三三年。  
 一六六九年五月一三日廣東に死す,年六七  
 孟三德 會,葡人,一五八五年。  
 一六〇〇年六月二三日澳門に死す,年六九  
 湯若望 會,獨人,一六二三年。  
 一六六九年八月二五日北京に死す,年七八,別號道未と稱す  
 林德瑤 會,葡人,一七四二年。  
 一七八五年一月五日北京に死す,年七五  
 魯德照 會,葡人,一六一三年。  
 一六五八年五月六日澳門に死す,年七三  
 高守謙 フ派,葡人  
 一六三七年疾を以て歸國す,以後欽天監に教士を用ゐず  
 艾啓蒙 會,獨人  
 一七八〇年死す,年七一  
 林安多 會,葡人,一六九五年。

Slavizsek, Karl.  
 Smogolenski, Johann Nikolaus.  
 Soerio, João.  
 Souza, Manuel da.  
 Stadlin, Franz.  
 Stumpf, Bernhard Kilianus.  
 Suarez, José.  
 Tarte, Pierre Vincent du.  
 Tallez, Mancel.  
 Terenz (Schreck), Jean.  
 Tesard, Jean.  
 Thomas, Antoine.  
 Tillish, Franz.  
 Trigault, Nicolas.

嚴嘉樂 會,獨人  
 一七一六年北京に來る  
 穆尼各圖 字如德,會,波蘭人  
 一六六〇年北京に來る  
 蘇如漢 會,葡人,一五九五年。  
 一六〇七年八月澳門に死す,年四一  
 索瑪諾 會,葡人  
 一七〇七年頃布教す  
 林濟各 會,獨人  
 一七四〇年死す,年三四  
 紀利(理安) 會,獨人  
 一六三四年北京に來る  
 蘇霖 會,葡人  
 一七三六年死す  
 湯尙賢 會,佛人,一七〇二年。  
 一七二四年死す,年五五  
 德瑪諾 會,葡人,一七〇四年。  
 一七三三年漳州に死す,年四七  
 登玉函 會,獨人,一六二一年。  
 一六三〇年北京に死す,年五四  
 龐克修 會,佛人  
 一七〇七年頃布教す  
 安多 會,佛人  
 一七〇九年死す  
 楊乘義 會,獨人  
 一七一六年死す  
 金尼閣(各) 會,佛人,一六一〇年。  
 一六二八年一月二四日杭州に死す,年五一

Tudeschini, Augustin.	杜奥定	會, 伊人, 一六三一年。 一六四三年福州に死す, 年四五
Ursis, Sabathianus de.	熊三拔	會, 伊人, 一六〇六年。 一六二〇年五月三日澳門に死す, 年四五, 別號を有嗣と稱す
Vagnoni, Alfonso.	高一志	會, 伊人, 一六〇五年。又玉璽蕭とも稱す 一六四〇年四月十九日死す, 年七四
Valet, Jean.	汪汝望	會, 伊人
Varo, Francisco.	萬濟國	ド派, 西人, 一六五四。
Verbiest, Ferdinand.	南懷仁	字動補, 一字致伯, 薩摩敏, 白人, 會, 一六五九年。 一六八八年一月北京に死す, 年六五
Visdelon, Claude de.	劉應	會, 佛人, 一六八五年。 一七三七年死す, 年八二
Wolfgang de la Nativité.	那永福	カルメル山派
Xavier, Saint Francois de.	方濟各	會, 西人 一五五二年二月二日上川島に死す, 年四六

備考 一、此表に用ゐたる略字左の如し

會——耶蘇會

ア派——アゴステン派

フ派——フランチェスコ派

ワ派——ワンサン派

ド派——ドミンゴ派

二、年號のみを記したるは支那渡來の年なり艾儒略の下に記せる

一六一三」とあるが如き即ち一六一三年支那に來るの略なり

左の數項は本文の頭註とす可きものなれども體裁上卷末に收むることゝなせり。

〔六頁二二行〕 カリカットの名は Kali-kukkuṅ 鷄鳴  
Kali-kotta 鷄城の轉訛せるなり。

〔八頁八行〕 ザモリンはタミル語 Samuri の轉訛なり而してサムリは又梵語 Samudri の轉訛にして海孫若くは海王の意なり。

〔一四頁二行〕 葡國の諺に曰くゴアを見たるものはリスボアを見るに及ばず Queen vio Goa exaui de vár Lisboa.

〔五一頁〕 果毅公額亦都、信勇公費英東、勇勤公何和理、扈爾漢、安費揚古を開國の五大臣と稱す。果毅信勇兩公は太廟に配享せらる。

〔五五頁〕 萬曆四十二年軍制を改め從來の四旗を増して八旗と爲す。初め四旗の時はその旗紅黃白藍の純色を用ゐて之を分ちしが茲に至り幅の黃白藍なるものは紅緑を附しその紅なるものは白緑を附して之を鎮して八旗と爲す。

皇明從僉錄に據るは太祖の萬曆四六年明に寄せたる書には建州

國汗と號し其翌年朝鮮に與へたる書に後金國汗と始めて見たるよし。

〔六二頁五行〕 是より先文館を内三院と改めしが五月内三院の官制を定め内國史院、内秘書院、内宏文院各々大學士を置く。

〔七七頁〕 順治一五年七月大に官制の改革を行ひ内三院大學士を改めて殿閣大學士となし次で同年九月の上諭を以て中和殿、保和殿、文華殿、武淵閣、東閣の名稱を定む。聖祖親政に先ち索尼、蘇克薩哈、遏必隆、繁拜の四人輔政大臣となる繁拜威福を弄しその罪現はれ康熙八年刑せらる。

〔一四二頁八行〕 カザーク人なる種族の記事は第十五世紀の中葉より始めて史上に見ゆ、元來最下級兵士の名稱なりとの説あり。

エレークは本名を Vasil Alein と云ふエレークとは渾名にて手磨の意なり。

〔一四六頁一行〕 東部西伯利無告の民をして「天帝は高くツアールは遠く共に及ぶ可らず」と嘆せしむ。

〔一四九頁〕 一五九四年の建設に係るイルチシ河畔のタラは當時の要害の好模範なり。木道の壁及び塔を以て圍める内砦の廣さは一邊九十八ヤードの平方形を爲し内に教會あり地方官の官邸あり火藥庫あり屯倉あり外城の柵は長さ千四百呎幅千五十呎の長方形を爲し之と内砦との間に丸太小屋を建つ。タラには六十人の哈薩克隊を駐屯せしめしがその防備區域は延長二百五十哩乃至四百哩に達せり。

〔一七一頁一〇行〕 哈薩克人は七十年ならずしてツラル山よりペーリング海峡に至りしもアナドイル河より堪察加に至るには殆んど五十年を要したりとウラゲマイルに見ゆ。

〔二九六頁八行〕 初め内閣太和外にあり西北兩路用兵に際し機密漏洩を慮り始めて軍機處を陸軍門内に設け鄂爾泰と張廷玉とを以て軍機大臣と爲す是より内閣の實權軍機處に移る張廷玉は雍正四年大學士に任ぜられしより乾隆二年に至るまで事實に於て宰相の事に任じ軍機處諸格式の如き皆その制定に係る。雍正帝の遺命あり死後太廟に配享せらる。

明治三十三年六月十五日印  
明治三十三年六月十九日發行  
明治三十六年六月廿五日訂正第二版印刷  
明治三十六年六月廿八日訂正第二版發行

著者  
兼發行者

田中萃一郎  
東京市芝區高輪臺町二十八番地

印刷者

中野鏝太郎  
東京市京橋區南小田原町三丁目九番地



印刷所

帝國印刷株式會社  
東京市京橋區築地三丁目十五番地

發賣所

東京市日本橋區通三丁目

丸善株式會社書店

# 東邦近世史

上卷 定價 金 壹 圓  
下卷 定價 金 壹 圓 七 拾 五 錢

本書下卷に對する重なる新聞雜誌の批評左の如し

**時事新報** 慶應義塾大學教授田中萃一郎氏の著述にして其上卷は嚮に東邦協會より發行したり本卷も上卷と同じく田中氏が多年來東洋諸國の近世史を研究したる結果豊富なる材料と精密なる調査に成りたるものなれば編述頗る宜きを得十九世紀の後半に於て東洋諸國に起りたる重大の事件を網羅して剩さず形勢の推移する所を明にせり學者政治家の參考書として最も適當のものなる可し

**報知新聞** 日本開國より説き始め十九世紀の末年に至る日本印度支那朝鮮に於ける最近の情勢英露の東方經營に關する事實は詳細に網羅せり經世家の參考書として頗る有益なる者なり

**日本** 日清交渉の初期支那長髮賊の平定露國東方侵略の事蹟に就き評論的に敘述したるもの本邦多事の今日には適當の參考書たるを失はず

**外交時報** 所々に散亂せる事實を一括して善く之を整頓し參考の爲最も便利なり此旨保證す

## 史學雜誌

上卷は端をヴスコ・ダ・ガラの印度航路發見に起したれば上下を通覽すれば東邦近世の歴史を詳知するを得可し吾人は氏の研鑽の頗る歩を進めしに感じ多大の裨益を世に與へしを謝す

## 慶應義塾學報

歐洲列強の均衡は伯林會議の頃より略ぼ一定し各國の産業組織と軍備の對抗は容易に事端を歐洲に發せしめず列強權力平衡の中心は今や已に歐羅巴を去りて亞細亞に移れり是に於てか清韓は勿論遼羅と云ひ阿富汗と云ひ列強が依て以て野心を逞うせんとする驅逐場たらざるはなく今後に於ける競争は一段の目覺ましきものあらんとす本書は即ち重に十九世紀後半に於ける是等歐亞交渉の顛末を敘述し其間の關係を明細に説論しあれば其世界の政局が如何に進行しつゝあるか又今後如何に進行す可きかを知らんと欲する者に取つては無二の參考書たる可し尙ほ本書は中學程度の學校に於て東洋史教授の參考書として恰好なる可く之を英譯して外人に讀ましむるも亦好著たるを失はざる可し

**Japan Times** The Modern History of the Far East by Prof. Tanaka of the Keiojinku Univer-

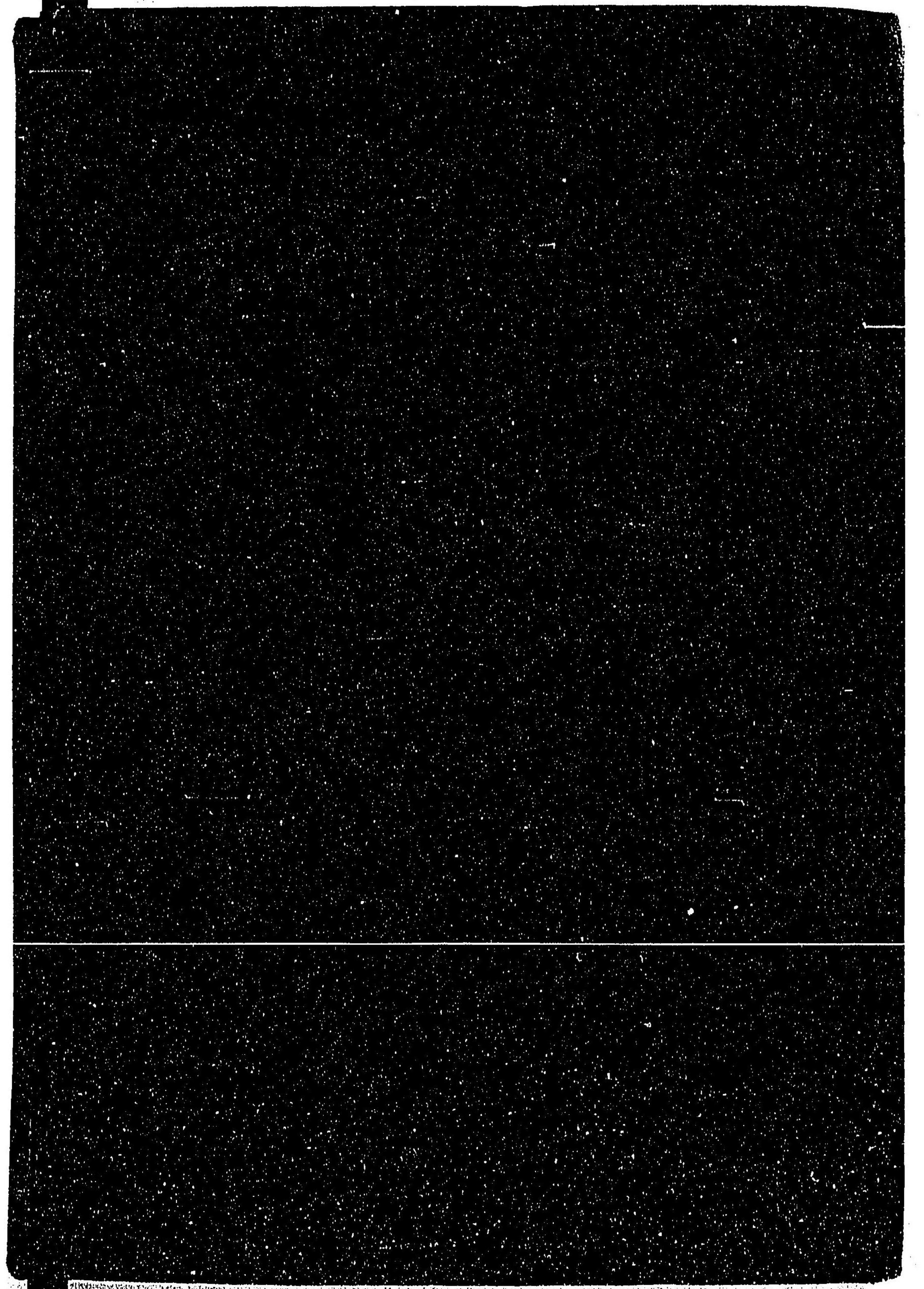
sity, is a work of far greater pretension, and is decidedly valuable. In the matter of style the author is evidently a follower of popular historians and an imitator of the style carried to great perfection by such masters as Macaulay, Froude, Carlyle, to confine ourselves to English authors. At any rate

the work is written in an easy lucid style making it delightfully readable. It is Vol. II that is now before us, the work consisting of two volumes, and in the ten chapters contained in this concluding volume we find treated all the important events that occurred in Central and Eastern Asia from the opening of Japan to Western intercourse to the situation of the Far East in the 1888—1900 period, with all the important political changes and movements in China, Korea, Central Asia and India intervening between the two chapters. Space does not permit us to write any further here, and the present reviewer must confine himself to calling Prof. Yanaka's History the most exhaustive and on the whole the best work that has yet appeared on the subject in our language. It excellently suited to serve as a text book in Higher Schools and as a reference book for those who wish to be up to date. The present volume contains 670 pages bound in cloth, the price being 1.75 *gen*. The 1st volume is 1 *gen*, and the work is on sale at Messrs. Z. P. Maruya & Co's.

---

發 賣 所 東京市日本橋區通三丁目 丸善株式會社書店

昭和十五年三月七日  
川牧海太郎





003337-001-6

220-Ta795T(t)

東邦近世史

田中 萃一郎/著

上

M36-38

ACC-1838





